青春memory

N"our"vice

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――――高校生、それは青春という言葉が一番似合う時期だろう。

その高校生の一人である彼、彼女たちが同じ校舎の下、笑いあったり、恋をしたり、していたり、悩んだり、時には切ない……そんな青春を謳歌する。

これは、ごく普通の高校生達の青春の記憶……。

現実世界で碌に青春を送れていない作家たちが書く妄想青春ラブコメ！

あなたたちが求めるものがここにあるかもしれませんよ？

～～～

N”ｏｕｒ”ｖｉｃｅはラブライブ！ハーメルン作家で作ったグループです！

メンバーは

・５代目の鍵使い

・うぉいど

・夏風　櫂

・イチゴ侍

・へびー

・雪桜（希う者）

・さとそん

以上の計７名です！
この作品共々、各人の作品もお楽しみいただけると嬉しいです！

目次

秋原　詠斗の日常 ―― 1
朱音と透閃と白月 ―― 9
海斗と彩は幼馴染み ―― 14
詠斗と俳句とバカ騒ぎ ―― 22
ボッチな彼女は俺の嫁 ―― 29
蕎麦屋の息子の日常 ―― 38
ゲームの延刻 ―― 45
オタクたちの日常 ―― 53
キャンプと失態と恋心 ―― 59
真也の策略（？） ―― 66
青春はレモンの皮の味 ―― 72
砂糖大さじ2杯の甘さ ―― 80
蕎麦とうどんの戦争 ―― 88
カラオケと友 ―― 95
カードゲーム（物理） ―― 100
テスト勉強 ―― 105
告げられた想い ―― 112
楠葉生の濃い一日 ―― 119
合宿に向けて ―― 126
熱盛りッ！なリア充共 ―― 132
夢 ―― 140

秋原　詠斗の日常

「おい、急げ！もうすぐチャイム鳴っちまうぞ！」
「分かってるっつーのッ！お前が足遅いから合わせてやってんだろうがっ！」
「んだとっ!?というか元はと言えばお前が待ち合わせに遅れてきたのが悪いんだよ！」
「あー！もううるさい！そんなことよりまずはどうするか考えようよ！」
　朝の車通りの少ない通学路に男３人のけたたましい声が響き渡る。普段ならば同じ高校の生徒で溢れかえっているはずの道だが今日は全くと言っていいほど人の影は見られない。
　――理由はそう、遅刻しているから。

「はぁはぁ……よし、校舎が見えてきたぞっ！」
　３人の視界が高校の校舎を捉えた頃、時刻は既に８時４３分。つまり始業の時間よりも３分ほど遅れている。
「今日の一時限目は英語だからな、北条先生はいつも５分くらい遅れてくるしまだ間に合うだろ！」
　しかし高校生というのは不思議なもので、自分の意思で高校に通っているにも関わらず授業を受けたくないが為に先生の細かい情報を調べあげているのだ。
「いや～、それにしても北条先生は美人だよなー！特にあのたわわに実ったおっぱ（（ｒｙ」
　「そんなこと言ってる場合か童貞！いいから急ぐぞ！」
「童貞とは何事だ!?俺はもうヤリｔ……じゃねぇや、まぁ安心しろって。お前ら、あそこを見てくれ」
　少年が指を指している先を見ると彼らの教室である２―５の窓か

ら顔を出している少年がいる。
「あれは……実音??どうして、」
「さっき俺が某ＳＮＳで命令しておいた。先生が教室に来るまでは後２分がいいとこだろうから、生徒玄関から入って階段を登ってちゃ間に合わないかもしれないしな！そこで海斗、お前と俺で創をあそこの窓に投げ入れるぞ！」
「……え？　　詠斗、それ本気？」
「おう、もちろんだ。出来るよな？創、海斗？」
「いや、俺は構わないが……創は行けるか？」
「はぁ～……、わかったわかった！行きますよ、行けばいいんでしょ！こんな無茶な作戦立てて、詠斗！後で仕返ししてやるからなっ！」
「よく言った、創！それでこそ男だぜっ！それじゃあ先生が来てたら適当に誤魔化しといてくれよ！海斗、手を出せ！」
「おう。創、後のことは頼んだぜ！」
「はぁ……仕方ないな。了解」
　そういって二人の少年――海斗と詠斗はお互いに身体を向けあって手を組み合わせ、腰を低く構える。
　二人に向かって走っていく少年――創は覚悟を決めたような顔つきで全力で走っていく。
「「いっけえぇぇーーっ！」」
「うおおぉぉーっ！……やっぱり怖い怖い怖い怖い怖いいやぁあぁぁーっ！」
　３人の雄叫びが揃った時――創は翔んだ。悲鳴をあげながら。
　そして見事に教室へとホールインワン。
「うおっ!?九重!?」
「どうしたの創くん……？」
「いつも冷静な創がこんなアクロバティックな動きをするなんて……ギャップ萌え…堀りたい…／／」
　創が入っていった（投げ飛ばされた）教室からは歓声（？）が聴こえてくる。先生の声が聞こえてこないので恐らくまだ来てないのだろう。

「無事成功したな！それじゃあ俺達も行くか！」
「創……無事だといいけどな。」

☆☆☆

「あ〜ぁ〜ーやっと終わったーっ！」
時間は流れて今は放課後。
紅く染まった夕焼けが照らす教室では４人の男子が机に向かってグッタリしていた。
彼らの机の上には『始末書』と書かれたプリントが大量に置かれている。
「創っ！お前許さねぇからな！なにが「詠斗くんと海斗くんは一緒の布団で抱き合ってて遅れました」だクソ野郎！」
そのうちの１人、秋原　詠斗が音を立てて立ち上がり、隣の席にいる九重　創を指しながら言う。
「あははっ！だからやり過ぎたって謝ってるじゃないか」
それに対して創は顔をニヤつかせながらおどけた様子で反論する。
「まぁまぁ詠斗、こればっかりは俺達もやり過ぎたしもういいだろ」
「……創も、やりすぎ。」
そして海斗は詠斗を、実音は創を諌めている。

何の話かと言うと、今朝の１件で詠斗と海斗により教室へと投げ飛ばされた創は仕返しとばかりに、すぐにやってきた先生へとキツすぎる嘘の情報を言ったのだ。
その内容は「海斗と詠斗が一緒のベッドで抱き合っていた」ということ。もちろん２人とも男の子である。決して男の娘ではないのだ。
つまり、……まぁ、そういうことである。
さらに運の悪いことにやってきた先生は北条夏子先生という、生徒のいうことはなんでも信じてしまう人である為、余計におおごとに

なってしまったのだ。
　結果として虚偽の申告がバレ、海斗と詠斗は始末書、創は責任を取ってその手伝い、教室の窓を開けておいただけの実音も何故か詠斗に強制連行されて今に至る。
「それにしても……君達はなんで遅れてきたの？まさか本当に抱き合ってたわけじゃないでしょ……？」
　先に学校に着いており、詠斗たちが遅れてきた理由を知らない実音からの質問に対して詠斗が口を開く。
「実音も冗談はよしてくれ、――俺が昨夜にアニメ大量消化してたら寝落ちして時間に遅れただけだよ」
「「「はぁ～……」」」
　何故か軽くキメ顔で理由を説明する詠斗に対し、その場にいたほかの４人は盛大な溜息をつく。
「なんて言うか……いつも通りだなぁ」
　そう、秋原詠斗はオタクである。それも極度の。
　休み時間は同じ系統の友人とアニメについて語るｏｒラノベを読みふけり、家では積みゲー積みアニメの消化に徹する。
　これだけを見れば根暗そうな人間にも見えるが、とても社交的で趣味の範囲が広いせいか明るいオタク、一緒にいて楽しいやつ、ぐらいの認識を周囲からされているためオタクに厳しい現代社会でも浮かずにいる。
「そうそう、でさ！昨日はラブｒ……」
「詠斗、もうそのへんにしておけ。お前は語り出すと長くなるからな、このままじゃ家に帰れなくなる」
「んだとっ!?あの作品はな、秋に２期も決定していて……」
「わかった、わかったから。ほら、これ（始末書）生徒指導室に提出して帰るぞー」
「「はーい」」
「ちょ、待って！今日は布教のためにＢｌｕ―ｒａｙ全巻持ってきたから！視聴覚室でも借りて鑑賞会しようぜ！な!?」
「「「……スタスタ」」」

「……無言で俺を置いていかないでえええーっっ！」

☆☆☆

「じゃあな、実音、創」

西日が駅の近くのビルに反射し、辺り一面をオレンジ色に染め上げる。

駅前にある気温計は２０℃を示しており、春の陽気が感じられる。

「あぁ、また明日な～」

この駅が俺たち４人の別れ道となっており、実音・創の２人は線路を跨いだ向こう側へ、俺と海斗はそのまま駅を過ぎた住宅街の中へと入っていく。これがいつもの帰宅ルートだ。

「あぁ、２人ともお待たせ～」

しかし今年度からは今までとは少し違う。

「早かったな、彩、健誠」

今年の春から俺たちと同じ楠葉学園に通っている、一つ年下の幼馴染みである天谷　健誠と英莉星　彩もこの駅で合流して帰ることになっている。

「何言ってるのよ、そっちが遅かったんじゃない」

長い黒髪を右手の人差し指でクルクル巻きながら少しふてくされたような態度をしている貧にｙ……ロリ体ｋ……幼い少女が英莉星　彩。

「まぁまぁ彩、落ち着いてよ。２人は部活も無かったはずなのに一体なにやってたんだ？」

そして彩を宥めながら話題を振ってくるのが天谷　健誠。優しそうな顔つきとは裏腹に高１とは思えないくらいのガッシリとした身体付きで、運動神経が良くボクシングをやっている。

「簡単に説明するといつものアレだな」

「「あぁ、なるほど……」」

健誠と彩は呆れたような表情を浮かべてこちらを見やる。

「詠斗も普通に過ごしてればモテるのに、勿体ないわね……」
「いいんだよ、俺はオタクであることに誇りを持ってるんだ。だからソッチの教養があって趣味に寛容な人か声優さんと結婚するって幼稚園児の頃から決めてんだ」
「まぁたそうやって開き直ってさ……詠斗らしいというかなんというか」
「なんだお前ら、俺に反抗する気か？この重たいリュックに入ってるラブライブ○サンシャイン○Ｂｌｕ－ｒａｙ全巻で頭かち割ってやろうか？」
「「ごめんなさい許してください」」
おい、即答やめろや。

「なぁ、早く帰ろうぜ？朝からバカとバカなことしたせいで疲れてるか寝たいんだが……」
そんなバカバカ連呼しなくてもいいじゃないかよう。君も案外乗り気だったろうがよぉ。

「それにしても、お前らが入学してからもう半月か？」
先程までいた駅を離れ、４人で夕焼け空の下を歩いていると突然隣を歩いていた海斗が呟く。
今は四月の下旬。並木道に咲いていた桜も少しずつ散り始め、やがて春の暖かな陽気も夏の熱気へと変化していく。
「あー、確かにもう半月だね。意外とあっという間だなぁ……」
「そういや、お前らはなんで楠葉受けたんだっけ？」
自慢ではないが俺の通っている高校である楠葉学園はそれなりに偏差値の高い、地元でも有名な進学校だ。なのでここに入学する者には少なからず目的がある。
「俺はやっぱりボクシングかな。ここが県内でもトップクラスの設備があるし。なにより詠斗たちもいるしね！」
お、おう……なかなか嬉しい事言ってくれるじゃないか健誠よ。

「私は特に理由はないわよ？……た、ただ、海斗がいるだけで……」
「ん？最後なんかいったか？」
「な、なんでもないっ！」
だがしかし、彩。てめぇはダメだ。なんだそのテンプレなツンデレは。こんな公衆の面前でイチャつくんじゃありません。
そして海斗、お前もそろそろ彩に好かれてることくらい気づけよ、朴念仁。

そんなことを話しているといつの間にか４人が別れる交差点へとたどり着いていた。
やっぱり人と話しながら帰ると時間って早く感じるよな～。
「それじゃ、また明日な～」
「おう、じゃあなー」
「うん、また明日」
「じゃあね」
いつものようにみんなへ別れの挨拶を告げ、自分の家へと１人で歩き始める。
俺は交差点を右へ、健誠は左へ、海斗と彩はそのまま真っ直ぐ。あのふたりは家が隣だからな、どうせ夜になったらベランダでイチャコラしてるんだろう。（彩が１人ではしゃいでるだけだが）
１人で歩いているとやはり色んなことを考えてしまう。
あ、そういや今日はあのアニメの放送日じゃん！という実にアニメ好きらしい思考だったり、あー明日はレポートの提出日か、めんどくせぇ……という学生あるあるの思考だったり、そろそろ進路決めなきゃな……というこれからのこと。
先程も言ったようにうちの高校は進学校だ。早い奴らは１年生の頃から、だいたいの奴らは２年生の今頃から受験勉強を始めている。
だからといって、じゃあそろそろ俺も……なんていうのはなんだか周りに流されているだけのようで……でもやらなきゃ将来が……ｅｔｃ．……なんて思考が空回りしてしまう。
やだなぁ、俺ってば思考がウロボロスしちゃってるっ！

……はぁ、ほんとどうしようか。
ただ1つ言えるのは、自分はいまの状況が好きだ。
海斗がいて、健誠がいて、彩がいて、実音がいて、創がいて、――
みんながいて。
みんなでアホなことやって怒られて、それでも懲りずにもっとアホなことをしてもっと怒られて。
そうしてキレた俺をみて笑っている創をその他大勢で宥めて。
だからこの日常をまだまだ続けたい。
高校2年生という1年間は人生に1度しかないのだから。
この1年間は、青春は――終わらせない。

朱音と透閃と白月

あと1年
いや、正確にはもう1年もない。１０ヶ月くらい。
時間が進むのは早すぎて私は振り回されてるみたいだ。
私は彼みたいに道を見つけられていないっていうのに。このままどこへ行くのか

まだ、わからない。

～～～

ているだけだから
　そう思ったとき隣の教室からさようならの声が聞こえてきたと思ったら2人はすぐに来た。
「朱音　悪い！ＳＴが長引いた！」
「朱音ちゃん待たせちゃってごめんね！」
　谷坂　透閃　と、橡　白月
　私の大切な友達。
「おう谷坂、お前ちょうどいいところに来たな」
「え？瞬先生　　ぼ、僕は特に用事ないんですけど～……　」
「お前この前の小テストの直し出してねえだろ？さっさと出せ。なんなら直しのプリント今渡すからここでやってから部活にいけ」
「ま、まじかよ……」
　来たと同時にサボりを指摘される友達だけどまあ、そういうやつだから……
「透閃くんなにサボってんのよ…。
　はぁ、こんなやつほっといて行きましょ、朱音ちゃん。」
「うん、行こっか。じゃあ透閃はちゃんと精算してきなさいよ。」
　透閃は置いていく。慈悲はない。
「ちょっとそれはな……
「はい、これ直しプリントな。やったら行ってもいいからさっさとやれ」
　ってくっそ～、やってやるってなにこれ!?いつもの直しプリントより埋めるところが多いんだけど！」
「サボったお前が悪い」
「ああ、もう！やってやるよ！１０分で終わらせてやるよ！」
　結局、透閃は２０分かけてこのプリントを終わらせましたとさ。
　～～～～～～～～～～
「くそ、絶対にこれは俺に対するいじめだろ。」
「まあまあ、やってなかった透閃くんがわるいんだから文句言わない

の。」
「それで今日はなにやるの？」
「あ、今日？特に何もやんないよ。」
『……はい？』
「いや、元々宿題でもするつもりだったんだよ？でもさっきのでやりたくなくなっちゃったから今ここでおしゃべりしてるだけだよ？」
「……ねぇ、つっきー。帰ろっか。」
「そうだね。帰ろっか。」
「ちょっ!?俺だけ置いてかないで！」
やっぱり私はこの空気が好きだ。つっきーと透閃と私でたわいもない話をして、こうして時間を過ごしていく。
来年もこの３人で一緒に、なんていうのは難しいってわかってる。だからこの１年は大切にしよう。
そう思った。

～～～

ようやく追い付いた。といってももう駅の目の前だったけど。
というか白月がやたら辛辣なんだけひどくねえか？
まあいいか。
～～～～～～～～～～
「お、電車来たな。」
なんだかんだしているうちに電車がホームに入ってくる。
方向の違う白月とはここでお別れだ。
「じゃあね、つっきー！また明日！」
「じゃあね、朱音ちゃん。透閃くんも。」
「おう、またな。」
『ドアが閉まりま～す　ご注意下さいっ』
ドアが閉まり電車が動き始める
「ねえ、透閃
今日ね、キョウくんがね！……」
「…うん。」
朱音のいうキョウくんというのは朱音と同じクラスでイケメンといわれている洲玉　京介（すぎょくきょうすけ）くんのことだ。
そう、朱音は彼に恋をしている。
俺の想いは届くことはない。
一度同じクラスの女子に

『二人っていつも一緒にいてなんだかカップルみたいだね』
と言われたことがある。
俺はそのときから朱音のことが好きだったから「ないない」なんて言いながらも内心そうなったりはしないかな、なんて思っていた。

でも朱音は
「う～ん、ないね。
透閃はなんていうんだろう…そういうのじゃなくて……大切な友達…親友、かな？
あなたも同じでしょ？透閃。」

俺はそこで、言ってしまった。
「お、おう、そうだな。」

朱音にとって俺は特別大切な親友であってもそれ以上はない。
それでも、俺はこの想いを抱き続けてる。

～～～

海斗と彩は幼馴染み

高校2年生。それは高校生活が最も充実していたと言われる年齢である。俺はなるほどなと思った。今だけの青春を味わいたい。でも勉強もしっかりやって大学に進学したい。それが今の俺の気持ち。そして、そんな思いで入学した俺はある友人達と出会うことになった。

☆☆☆

高校生の朝は早い。無駄に早い。早すぎるから１０時始業にした方がいいってどこかの専門家も言ってたよね？

そんな屁理屈はやめておこう、虚しくなるだけだ。

まだ重い頭を抱えながら俺は家の階段をくだって下のリビングへと向かう。するとそこには幼馴染みが既にいた。

「……いたの」

「んっ……おはよっ、海斗」

俺と彩の紹介は1話でやってるからいいでしょ。眠いんだからあんまり頭を動かさないでほしいですはい。

えっと……どこからだったか……。そうだ、朝起きたら彩がいた所からだったな。（寝起きは機嫌が悪いのでメタ発言も大目に見てくだされ）

「顔洗ってきたの？目つき悪いわよ？」

「別に、顔は洗ってきたし、目つきもいつも通りだろ？　それより、なんで彩がここにいるんだ？」

彩と家は隣同士だが、こうして朝に俺の家にいるのは珍しい。登校は大体一緒だけどね。ほらそこ、リア充とか言わない。俺と彩はそんな関係じゃないから。てか、彩は俺の事ウザがってるしね。ツンツンしてるだもん、そんな空気ないって。そういや、この間は彩が日直だったから先に行っていたな。

「もし、あの時彩も一緒だったら彩も遅刻だったなぁ」

「そうなった場合でも詠斗置いてから行くわよ。」

「えげつないなお前……」
待ち合わせ場所でアワアワする詠斗の姿が目に浮かぶな。ぷかぷかーともしてそうだけど。ぷかぷかーであわあわでー。ん、眠気もだんだん覚めてきた。あれ？話ズレてね？
「で？私がなんでここにいるかはどうでもいいの？」
何故かムスッとしながら聞いてくる彩。こいつ、黙ってれば可愛いのに。スラッとのびた長い髪に、守りたくなるような小柄な体に、胸は……これからだとしても、贔屓目なしの美少女なのだが、何故モテないのだろう……。彩と俺が一緒にいるとみんなニヤニヤしだすし……、詠斗は殺意がこもった目で俺を見てくるけど……。
「な、なによ……人の体をジロジロと見て……」
「ん、いや何でもない。何でお前がここにいるかだろ？　どうせ、母さんと父さんが早く家出ちゃって、家の前で待ってたお前に中にいろとでも言われたんだろ？」
「当たり。ほんとこういうは鋭いのに……」
「最後なんて？」
「な、何でもない！　ほら、早く準備しなさい！」
「あいあいさー」
これが俺の騒がしい朝の日常だ。朝くらいは静かに過ごしたいものだが……。
☆☆☆
場所はところ変わって通学路。隣では彩がてくてくと歩いてる。ふむ、てくてく彩。何考えてんだか。
そんな事を考えているといつもの集合場所に着いた。もうそこにはいつもの2人が揃っていた。
「よう、海斗、彩。遅かったな」
「おはよう、海斗、彩。」
「おっす、詠斗、創」
「おはよ」
詠斗と創の説明も1話でやったから説明は要らないよね！　そんな朝の挨拶を済ましたあと雑談でもしながら学校へと歩みを進める

俺たち。
俺は詠斗と、彩は創と喋りながら歩いていた。
「なぁなぁ！　俺が勧めたアニメ見てくれたか!?」
「まぁ、暇だったし一応全話見てみた。」
アニメとは詠斗がＢｌｕ―ｒａｙまで用意して俺たちに一個づつ貸し出したものだ。まさか、全員分あるとは思ってもみなかったけど。あれ一個一個は高いはずなんだけどなぁ。
「でさ！でさ！　推しは誰だ!?」
「推し……あぁ、好きなキャラね。あのオレンジ髪の主人公の子かな」
「ばっかお前。絶対桜色の髪の子だろうがよ！　あの控えめな胸が（ｒｙ」
「まーた胸の話してるよ」
全く……女の子の良さは胸の大きさじゃないのに……
「そうだ！そうだ！」
「「!?」」
ナチュラルに俺の心を読むなよ彩ぁぁ!!!　詠斗も創も驚いてるじゃん。
はぁ……俺の周りにはまともな奴は居ないのか？
あ、創がいたや。創ならまともな判断を下せるからね！　……多分。
そんな事を話してる間にもう学校へと着いていた。玄関へと差し掛かった所で彩とは別れる。あいつは1年生で俺は2年生だからな！　そのまま3人で教室へと向かうため廊下を歩く。
廊下には仲睦まじく話す3年生の男女3人組に、友達と話しながらシャドーボクシングをする1年生。てかあれ健誠じゃん。朝練終わったのか。
そんな人々を眺めながら俺らは教室の前に立つ。さて、今日も頑張っていくとしましょうか。まずは朝の挨拶から！
「おはよう！」
『氏ね！リア充！』
朝っぱらからクラスメイトの男子ほぼ全員から罵倒されたのだが。

てか、詠斗も何やってんだよ！　創も苦笑いじゃねぇか！
「やっぱまともな奴はいないのか……」
『お前がな！』
誠に遺憾であります！　しれぇ！
☆☆☆
長ったらしい授業を終え、俺らは帰り道につこうとしていた。俺も詠斗達も彩も部活はやってないからな。やっているのはボクシング部の健誠くらいか。そんな事だから帰ろうとした時、ふと教室の外に彩がいるのに気づいた。
「……なんで、海斗にはいて、俺にはいないんだ……」
「実音も何言ってんの。彩とはそんな関係じゃないって。おーけー？」
「のーおーけーだ」
そこはのーおーけーと言っても良いのだろうか。実音の説明も（ｒｙ
「そんじゃ、また明日な」
俺は別れを告げるべくクラスメイトに挨拶をした。帰ってきた答えは……
『じゃあな！リア充！』
またもや、男子ほぼ全員がいい笑顔で中指を立てていた。いい顔してやがる。
なぁ、見ろよあの顔。いい笑顔だろ？　虐めてんだぜ？あれ。
「なにあれ？」
「嫉妬だって創が言ってた」
「そ、そう……」
何故か顔を赤くする彩。どこにそんな要素があったのやら。そういや、今日は春らしくなく暑いからそのせいなのかもしれない。熱中症ってどんな季節でもなる可能性はあるからな。
「熱中症ってどんな時期にもなるから気をつけとけよ」
「いきなり何……。てか、心配してくれるのね……」
そう言ってまた顔を赤くする彩。やっぱ熱でもあるんじゃないか

とも思ったが、至って元気そうなのでそれはないと思う。
さて、そろそろ帰るとするかね。
☆☆☆
「そう言えば……」
「どうした？」
帰り道の途中に彩が何かを思い出したかのように立ち止まる。一体全体どうしたというのだろうか。すると彩はカバンをゴソゴソとしだした。一体何があるのかと思っていると彩は何かを取り出した。
「今日のお弁当にみかんが入っていたのだけど……いる？」
「マジで!?　いるいる!!!」
そう言って俺は彩の手からみかんをぶん捕る。いやー、やっぱみかんは最高ですわー！　この為に生きていると言ってもあながち間違いじゃないな！
「はぁ……アンタの恋人はみかんなの？」
「そうなんじゃないかな」
みかんに恋してると言っても過言じゃないくらいにはみかん大好きを自称している俺だ。多分そうなんだと思う。
「そうですか！」
そう言って彩は早足で歩いていく。……っておい!?
「あ、彩？　何かあったのか？」
「別に何も！」
アカン、これ完全にキレてるやつだ。何故だ？　彩がキレる所なんてどこにもないはずだが……。いきなりキレるってどういう事だ……。わっかんね。
俺はこのまま、彩と会話することなく家路につくこととなった。
☆☆☆
なによ！なによ！　海斗ったらみかんに恋してるだなんて！
だったら私の気持ちはどうなるってのよ！
……確かに、いつも素直になれずにツンツンしてるのは確かなのだけど……、でも！　海斗を想ってるこの気持ちは本物だというのに！
そんなやり場のない気持ちを抱いていた私は怒りながらもケータ

イの連絡音をソワソワと待っていた。優しい海斗の事だ。とりあえず謝ってくるだろう。でも、私は謝って欲しい訳では無い。だからと言って何をして欲しいというのもない。我ながら面倒臭いわねとちょっとした自己嫌悪に陥っているとケータイが連絡が入ったことを知らせてくれた。

バッ！と自分でもビックリするぐらいの勢いでケータイを見てみる。そこに書かれてあったのはベランダに出てくれというものだった。

急いでベランダに出てみると、海斗が既に待っていた。

――土下座をして。

って何やってんのよ!?

「な、何してるの!?」

「スマン！」

「え？」

「彩が何に怒ってるのかは分からないけど、何とか機嫌を直してくれ！」

「な、なんで？」

「俺はお前の笑顔が好きだから！」

「!?!?」

!?!?い、いきなりの告白!?　ちょ、ちょっと待って。落ち着くのよ英莉星　彩。相手は海斗。なにかきっと間違いがあるはずよ。勘違いしないようにしなきゃ。

つまりこれは海斗なりの謝り方なのだ。全く……これじゃ告白となんら変わりないっての。

「顔を上げて。海斗」

そう言って顔を上げた海斗の顔は少し涙目だった。私はそれを見てクスッと笑いがこみ上げてきた。

「あ、彩？」

「もう怒ってないわよ。それよりさっきのセリフとその土下座。女々しいわよ。やめときなさい。」

「え!?　そうなの!?　実音の奴……覚えてろよ……」

それ入れ知恵だったのね……。海斗ったらかなり鈍いから、なにかと弄られるのよね……。
「ま、怒ってないなら俺も安心だ。そんじゃ、また明日な」
……伝えてしまおうかしら。この想いを。そう思うと胸がとてもドキドキしてくる。顔が熱くなっていくのが分かる。そうして、私は部屋に戻ろうとする海斗に声をかけた。
「か、海斗！」
「ん？　なんだ？」
ここまで声をかけておいて二の句が続かない。告白してしまおうかとも思ったが……
「――やっぱり、何でもないわ。おやすみ」
「ん？　そうか。おやすみ」
そう言って海斗は部屋の中へと戻っていった。
やっぱりこの想いを伝えるのはまだ先にしておこう。今はまだ海斗の将来の方を優先させたい。
でも、それらが全部終わったら……私はこの想いを伝えよう。それまでは私も頑張るとしますか！
そう決意を新たにし、私は眠るため布団の中に入った。
「もし、付き合えたら海斗とあんな事やこんな事を……えへへ♪」
付き合えた後の妄想をしながら私は眠りにつく。
……やっぱり告白するのもう少し早めようかしら。
☆☆☆
「よかったぁ～」
俺は部屋に戻ってきたあとほっと一息ついていた。ったく、実音に某ＳＮＳで仲直りの方法を聞いたのが間違ってた……。くそっ！明日覚えてろよ……。さて、今日はもう遅い。さっさと布団に入る。そこで少し読みかけの本を読み進める。ふぅん、こいつの魔術回路ってこんなだったのか。
さて、もう寝なきゃな。俺は電気を消して目を閉じる。明日も楽しい日常が待ってると信じて。

「あ、宿題……」

その後、夜遅くまで宿題を片付けていてから寝たせいで寝坊してしまい、遅刻ギリギリで学校へ行ったのは言うまでもない。

詠斗と俳句とバカ騒ぎ

「マスター、起きてください。朝ですよ？」
ふと聞こえてくる少女の声を目覚ましに俺は起きる。
目に入ってきたのはミミをピョンピョンとさせ、毛で覆われた手で身体を揺さぶってくるロリ少女。そう、ケモノだ。ロリだ。略してロモノだ。可愛いし尊いし可愛い。可愛いは正義って誰か言ってた気がする。
「う……んっ……おはよう」
「おはようございます、マスター。ご飯にします？シャワーにします？２時間１５００円コースにします？」
「飯食うから準備してくれ……」
最後の危ないフレーズは聞き流して飯と答える。
というかなんだ。２時間１５００円ってどこぞのホテルや。しかも意外と安いじゃねぇか。
「では、マスター。まずは私のミルクを」
「あぁ、今日も濃厚で旨いぞ」
☆☆☆
「うん、無いな。なんだこのクソ文章は」
４月１４日晴れ。絶好の引きこもり日和。この回は秋原詠斗（あきはらえいと）でお送りします。……誰に言ってんだろうな。
有名ｗｅｂ小説投稿サイトに投稿していた『ケモノを愛するすべての君へ』の第一話を読み直していたのだが……正直言ってキモい。キモすぎてキモい。キモすぎて語彙力無くなってきたかも。
「やっぱ、深夜テンションは怖ぇな……」
投稿された日時を見ると午前の１：３９だった。ほんと、当時の俺は何を考えていたのだろうか？謎過ぎてわけが分からなくなってきた。
こんな文章でも中々の評価をもらっていたことに驚く。去年から今まで投稿していたので計３８話、平均文字数は８３２０。まぁ、途

中でバトルとか深夜テンションのエッチぃシーンもあったから喜んでもらえたのは嬉しいが、今となっては読者の気持ちが分からなくなる。俺もよく振り返らずに書き続けたなって思う。

冒頭部分のあのやり取りで《よかった！》《エッチなシーンに期待しています！》という感想が来ていたのだが、《キモい。書くのやめろ》《まったくエロくねぇし。タヒね》という感想も来ていた。ここまで否定されるとキツいが、俺の小説では当たり前の反応だろう。他人の作品だったら☆0しか付けない自信しかないしな。これ、普通。

「まず文章がなってない。段落のつなぎ方もダメだな……。投稿やめよ」

思い立ったが吉日がモットーの俺は活動報告で一言添えて投稿休止を宣言する。1つの章がちょうどよく終わってキリがよかったのもあるし……次は新規開拓するか。苦手なラブコメ？ま、それについては後で考えるか。

そう考えていたとき、急に俺のスマホが机から落ちる。バイブで落ちたのか、いつも激しいな。と思いながら取り、開く。連絡内容を見て、重大なことに気づく。

「週末課題やってねぇぇぇぇぇ！」

☆☆☆

「さて、今回集まってもらったのは訳がある。お前ら、例のプリントは持ってきたか？」

俺の呼び掛けに合わせ、俺の部屋に集められた3人の精鋭たちはそれぞれプリントを取り出す。書かれている内容はどれも同じである。

週末課題とは何なのか、一応説明しておこう。週末課題、別名《クエスト》。毎週木曜日に提示されるものであり、終わらせて提出すれば評価という報酬がもらえる。難易度は☆1～☆8まで。なお、今週の難易度は☆5のもよう。

「よし、やってないな。……では、これより第42回週末課題攻略作戦本会議を始める」

じつは結構な頻度でやってたりする。

「今回の攻略対象はお前らが持っているそのプリントだ」

パーティーメンバーは九重創（ここのえそう）、高道海斗（たかみちかいと）、日比谷実音（ひびやみおん）と俺の3人。
「このクエストを早く終わらせて……早く遊ぶぞぉお！」
「「おぉおおおおお！」」
「バカやってないで早く終わらせなさいよ」
士気が高まってきたところで英莉星彩（えりぼしあや）が口を挟んでくる。ちっ、いつまでも海斗に付いてきやがって……！
「こっちは課題が終わって暇なんだから……」
「なら、冷蔵庫から麦茶取ってくれ。あと、みんな分のグラスを」
「なんでよ、めんどくさい……適当に遊んでッ⁉」
自分のジョブも確認せずに違う部屋に行こうとしたため、俺は彩の前に瞬時に移動する。
「な、何よ……」
（海斗の水着写真1枚無料……どうだ？）
（……分かったわ。その代わり、いいのを用意してよ？）
（もちろんだ。んじゃ、よろしく頼む）
彩との取引も終え、自分の定位置に就く。実音は上手くやったみたいだなという顔で、創は呆れた顔で、海斗は訳が分からんという顔でこちらを見てきた。こういうときの海斗は扱いやすくて助かる。
「じゃあ、まず俳句から作ってくか。お前ら、基本知識はあるよな？」
「5・7・5……だったよな？」
海斗が言う。
「春夏秋冬いずれかの季語も入れるんだよね」
創が言う。
「なら……出来た‼」
実音が言う。というか、もう出来たのか。こいつが出来なかった理由は知識がなかったから……？いや、そんなことは無いよな。流石に小学生でも分かるはずだし……な。
実音の作品
＜水着回　触手遊び　肌ポロリ＞
「「分かるわ～」」

海斗と声がハモる。やっぱりこの点では共感できるところはあるな。あいつも一応、オタクだし。
「バッカじゃないの」
ここで彩からの罵倒が。ま、当たり前だろうな。
「む、その言い方はないだろ彩。触手は素晴らしいんだぞ！異種生物が関わってくる作品ではこれが王道になっていて主人公が助けるという素晴らしいイベントがあるんだ。その時の女の子と触手のもつれ具合といったら、グヘヘｗｗｗ」
「実音、せっかくの容姿が台無しだぞ。思考をまともにしろ」
「容姿がまともじゃないやつに言われたくない」
「んだとテメェ！こいつ（海斗）よりはまともだわ‼」
「はぁ⁉もういっぺん言ってみろ！ゴ〇ドフィンガー食らわすぞ！」
「まったく……ほら、３人とも。彩が麦茶持ってきてくれたよ」
創がパンパンと手を叩き、やり取りの中に入る。彩も彩でちょうど喉が渇いた時に持ってきたから、タイミングを計ったんだろう。ほんと、いいやつだ。なんで、海斗はこいつの気持ちに気づかないんだろうとつくづく思う。
「お、彩どうも。というか遅かったな。詠斗の冷蔵庫が汚なすぎてどこにあるか分かんなかったのか？」
「冷蔵庫はきれいだったけどバカがいたわ。麦茶のパックを容器に入れないで冷蔵庫で冷やしてるバカが」
「あ、え、マジで？悪い。確認してなかったわ」
「ちょっと薄いかもだけど我慢して飲んでちょうだい。ないよりはマシでしょ？」
「そうだな。詠斗のバカが作ってねぇ方が悪いし」
「だから悪いっつってんだろ」
「いや、思ってねぇだろ。つーか、すっぱ！何入れたんだよ⁉」
「……みかん。海斗はみかん好きだし、今の時期にしては暑いからビタミン必要だと思って」

「あ、おう、どうもな……」
海斗はこの前の一件（3話参照）もあってか余計なことを言わないようにしている。いや、てか、こっちからしてみるとお前らはイチャイチャタクティクスやってるだけだからな。人前でイチャつくのやめろ。彩は顔を赤らめて「べ、別に良いわよ……／／／」ってデレてんじゃねえよ。「……死ねばいいのに」って言った創は放っておこう。ちょっと可哀想だ。
「おい、イチャこら野郎。俳句はできたか？」
「なんで俺を見てイチャこら野郎って言うんだよ」
「「目の前でイチャついてんだろうが!!」」
「はぁ……わぁったわぁった。俳句出来たから読むぞ」
創の作品
＜死ねばいい　破局しろ　リア充＞
「創くん、なに発表しちゃってるの⁉キャラぶっ壊れてない⁉」
「イチャついてる海斗がムカついた。後悔はない」
あ、創の目に光が灯ってない。これ、ガチなやつだ。
「というか、季語含んでないからアウトだろこれ！」
「何を言ってるんだお前は。創はちゃんと忌語を使ったぞ？死ねとか破局しろとか、な？」
「それは忌むべき言葉だろ⁉」
「そんなに騒ぐなって……いやぁ、やっぱいい俳句だね。流石、創だよ」
「あー、抗議しても埒があかねぇ！これが俺の作品だ！読みやがれ！」
海斗の作品
＜あはれなり　みかんの皮と　雪景色＞
「……ふんっ」
「「はぁ……」」
さっきまで無関心だった彩は海斗の俳句を読みに来た。しかし、期待してたことを言われなかったのかすぐに拗ねてしまった。その反応をみて、俺らもため息を吐く。

(((また、みかんかぁ……)))
「おいおい、彩。なに拗ねてるんだよ？どうだ、傑作だろ？」
ここで彩にふるあいつもスゴいな。自ら墓穴掘りに行ったぞ。仕方ない、ここで助け船は出しとくか。
「じゃあ、俺の発表するぞ」
「俺の評価は一切なしかよ！」
創の作品
＜わーすごい　よくがんばったね　お疲れさま＞
「川柳で返すんじゃねぇよ！つーか、誉めてねぇだろそれ！本当に評価はないのかよ⁉」
「……なぁ、発表していいか？」
海斗が暴走ぎみだな。彩も不機嫌になってるし……つーか、俺のゲーム起動してるぅ。格ゲーやってるし。え、うまっ。強くね？え、そこで……おぉー、スゲ。後で対戦しよ。
んじゃ、気を取り直してと言って俺は続ける。
「じゃ、俺の作品な」
詠斗の作品
＜線香で　落ちろ蚊トンボと　子は遊ぶ＞
「シロ〇コの名言だしてきたね。いいと思うよ」
「夏の子どもの無邪気っぽさが出てて良いね」
創と実音は口を揃えて誉めてくる。一方、海斗は……
「え、彩、どうしたの……ってジュースを何で入れんの⁉麦茶入ってたんだけど⁉」
「薄かったんでしょ？ならいいじゃない」
「そういう問題じゃねーよ⁉」
「そんなにみかんが好きならずっとみかんを愛してれば？」
怒りが収まらない彩に意地悪をされていた。そんなに傷つくなら自分から行けばいいのにと思うのは俺だけなのだろうか？

☆☆☆

「うっし、これで俺の五連勝！」
「また負けた……どんだけ強いんだよお前は」
あれから二時間、俺らと宿題の勝負は俺らの勝ちで終わり、皆は自由に過ごしていた。創と実音と彩ははしゃぎ疲れたのか眠ってしまい、海斗と俺は機動戦士の格闘ゲームをしていた。海斗はゴッドを使い、俺はデスサイズヘルを使う。ちなみに勝っているのは俺。
「かなりやりこんだからな！海斗には負けねぇよ」
「いつかボロボロにしてやる。ゲームでもリアルでもな」
「やれるもんならやってみろ。俺が返り討ちにしてやる」
口で競い合っているのがおかしくなったのか、顔を見合わせて笑う。そして、
「なぁ、詠斗。この関係……いつまでも続くよな？」
と、くそ真面目な質問が来る。
「は、なに？留年したいの？」
「いや、大人になっても続くかなって気になってさ……皆、夢とかあるし」
「そうだな……他人の夢に口出しできる立場じゃねぇよ、俺たちは。けどさ、この関係は変わってほしくはないよな。夢を諦めてまで友情を優先しろとは言わねぇ」
「俺さ、このメンバーでバカやってるときが一番楽しいんだよ。たとえ、会う機会が少なくなっても忘れないよな、この生活は」
「そりゃぁな。毎日が刺激的すぎて忘れるのはできねぇよ。ま、唯一忘れるのは勉強面の知識じゃね？」
「はは、そりゃあ違ぇねぇな」
冗談混じりに話し合って笑って、時には泣いて、時には喧嘩して――そんな毎日。だけどそんな毎日が一つずつ思い出として記憶に刻み込まれていく。青春の大切なセーブデータとして――――メモリーとして。

詠斗の作品
＜春色に　輝く俺たち　忘れない＞

ボッチな彼女は俺の嫁

高校2年に上がった。それで何が変わったかと言うと、さほど変わってない。朝起きる時間も、アラームが鳴る時間も何も変わってない。このまま普通に高校生活も終わるのかと、そう思っていた時、なかなかに面白い奴らに出会うことになった。

これは俺、大矢根春希という一人の主人公が登場する〝俺の物語〟でもあったりする。

――――朝は嫌いだ。

朝の訪れは全てをリセットさせる。例えばどんなにその前の日、充実した1日にしようとも次の日になってしまえば、また1から始めなければいけない。まるで苦労して作ったパズルを一瞬で壊される気分だ。

朝は嫌い。だが、朝の全てが嫌いなわけじゃない。そう思わせてくれる〝者〟が、今日もやって来る。

「はーるーきー」

「おう、凪咲」

「いつもいつも起きるのが遅いですね。あたしの彼氏さん」

「いつもいつもご苦労さまです。俺の彼女さん」

これが俺達2人の日課だ。一切表情も変えずに俺の部屋に入ってきて、何の感情もなし……かどうかは分からんが、呼んできたのは、俺の幼馴染みで恋人の蒼井凪咲だ。凪咲は、俺と一歳差で、今年から高校1年である。

「で、どう？」
「……どうって？」
「同じ高校で幼馴染みの恋人に起こされる気分は」
「大変素晴らしいです」
実は凪咲と俺は、互いにやってみたいシチュエーションをやり合うという変な付き合いをしている。ちなみに今日のこのシチュエーションは、俺がやってみたかったやつだ。……そこ、変人だとか言わない。

「でもこれ、普段と変わらないと思うんだけれど……」
「いや、気持ちの問題だ」
「気持ち……？」
「大抵の熟年夫婦って初心な心を忘れるもんだからな。だから今日、〝俺は幼馴染みの恋人に起こされているんだ〟って意識して起きた」
ちなみにお前ら高校生だろっていうツッコミは受け付けない。後、夫婦なの？　とかいう疑問も抱かないでくれ比喩表現だ。小さい頃からずっとこうやって起こされてるせいか、恋人になったはいいものの、いつもと変わらないと感じてしまうのだ。感覚的には、生まれた時から夫婦な感じ？
――多分麻痺してるんだと思う。まひなおしか、なんでもなおしをください。

「それより早く顔洗って、じゃないとカッコいい春希の顔がすぐに見れない。今でもカッコいいけど」
「うい～ってか、凪咲が来るの早いんだよ。俺のアラームが鳴る前とか……」
口ではグチグチと言いながら自室を出て、一階の洗面所に向かう。あ、ちなみに家は二階建てだ。それで凪咲の家はお隣さんなのだが、多分俺の家にいる時間の方が長いんじゃないか？　と思うようになってきた。

「……ふぅ、すっきりした」
「はい」
「サンキュー」
熟年夫婦のような会話でタオルを受け取り、顔にあてがい水気を取る。拭き終われば何も会話をせずに凪咲は、タオルを受け取ってくれる。
今さら言うのもあれだが、凪咲は既に我家の中を熟知している。俺の親が仕事の都合上、朝が早いのでいつも凪咲が朝食を作ってくれる。

「今日は和食」
「ご飯、味噌汁、漬物、魚……なるほど、確かにＴＨＥ・和食って感じだな」
「ＴＨＥ・和食は嫌だった？」
「そんな事は無い」
なぜなら俺は、凪咲の作るものは全て好きだからだ。だって美味しいから、ちなみに特に肉じゃがは格別だ。理由は凪咲の好物だから。

「「いただきます」」
「どう？」
「うん、味もバッチリだ。また腕上げたな」
「それは……春希に褒めてもらいたい……から」
「……」
はいー！　うちの嫁くっそ可愛いー！　なんだこれ何だこれぇ！
こういうふとした時に突然キュンとくる事言うんだよこの子はァ！　（※春希は時々キャラ崩壊します）
「……どうしたの？」
「いや、何でもないよ」
危ない危ない……キャラ崩壊する所だった（※本人は気づいてませ

ん）

それにしてもこんなふうに、のんびりと朝食を取れるのはいい事だな。それに目の前には美人の恋人と来たもんだ。……普通の男子高校生ならチャイム鳴っちまう！　みたいなこと思いながら遅刻ギリギリに学校着く……とかある意味青春してるんだろうな。

「あ……」

「なんだ凪咲」

「ご飯粒付いてる……取ってあげる」

そう言うと凪咲は、指を伸ばして俺の口元に付いていたご飯粒を取る。するとその指は、そのまま凪咲の口に運ばれ食べられた。俺にして見れば何気ない行動だが、傍から見ればこれも青春って言うんだろうか。

「ありがとう」

「どういたしまして」

短く会話を済ませ、また再び食事に戻る。やはりどこか俺達はズレている気がする。普通のカップルなら初々しく、あーんとか話に花を咲かせてみたりとかするんだろうけど、俺達のこれは、もうカップルとかじゃなく夫婦だな。

「ねぇ、春希。約束」

「あーあれか、今日発売の新巻一緒に買いに行こうって約束だったっけ？　……俺ＴＵＥＥＥＥ物って見てて飽きないか？」

「飽きない」

凪咲は、容姿こそ美人ですれ違う男が全員振り返るレベルなのだが、中身を開けば、ラノベ好き、某有名小説サイトの完結済作品はほぼ読了済み、だがアニメは好まないというオタクなのだ。そして凪咲が一番好きなジャンルが、俺ＴＵＥＥＥＥ物で簡単に言えば、主人公最強の無双ストーリーだ。ただ主人公が無双して女キャラを侍らせて、ハーレム作って……それの何が良いのか、俺にはさっぱりだ。

「そこまで断言されるか……」
「だってみんなカッコいいよ？」
「……妬くぞ」
「春希に嫉妬されるならいくらでも言う。それにあたしにとって春希は、他の主人公よりも最高にカッコいいあたしだけの主人公だもん」
こうやってたまーに意識させられること言うのが非常に堪らない。俺が俺ＴＵＥＥＥが好きになれない理由、まぁ察しがいい人はすぐ気づくんだろうけど、凪咲を夢中にさせられる主人公達が妬ましい。だから今みたいに凪咲に言われると、とてつもなく優越感に浸れる。

「とっても嬉しいお言葉感謝します。ヒロイン殿」
「お気に召したようで何よりです。それじゃ」
「「ごちそうさま」」

今日も今日とて、何気ない普通の一日が始まるのだ。

「俺と付き合ってくれ！」
「……」
はぁ……またか。もうこの告白の言葉は聞き飽きた。これならまだ電電文庫の黒の剣士さんとか、さすおにさんが無双してる所見てた方がきゅんきゅんする。それに図書館に来てまで告白しに来るなんて……ストーカーか何かなのかしら。
「ごめんなさい生理的に無理です。まず、あたしの読書の邪魔をする時点であなたは終わっているので、以上」

「あ、え……あの……」
「……」
何やら男の方は（名前は知らない）読書に戻ったあたしの横で、何か言いたげにしているがどうでもいい。はぁ……結局、今日も平和で平凡な1日だった。

「くそっ、ちょっと可愛いからって舐めんじゃねぇぞ！　1年のくせに」
その1年に必死に告白してたのは、どこの誰かしらね。少し毒を吐けば、寄ってくる同学年、先輩方はみんな態度を変えたり、この先輩のように逆上したりしてくる。

「やっぱ名前の通りだったな！　毒姫！」
あたしはよく冷めていると言われる。それは他人にだけだ。他人に無関心なだけで、物には関心は持つ。そんなあたしの性格も合わさって、入学後から頻繁に告白してくる男の方々をボロボロにするような毒を吐く。その結果、一部であたしに〝毒姫〟という二つ名が付けられたらしい。竜だったらハンターに狩られそうな二つ名だ。
気付いた時には、さっきの男の先輩はいなく、図書館が静かになっていた。もう外はすっかり日が落ちかけている。しかし、あたしには待つ人がいる。多分今日も物陰に隠れているのだろうか。

「冴えない彼氏の育成……だったっけ……あれ」
「なんじゃそりゃ彼氏育ててどうすんだよ。ヒモか？　そいつヒモなのか？」
あ、出てきた。こうやってツッコミを求めて呼べば出てきてくれる。なんかペットみたいで可愛い……そうだ、主従関係みたいのやってみたいな。今度お願いしようかな？

「今日も告白来たのか」
「最初から見てたんでしょ？」

「まぁな、お迎えにあがったら先客が来てたもんでね」
「隠れてみてなくてもいいのに……」
どうせなら「こいつ、俺の奥さんだからさ、あなたみたいなモブキャラが付け入る隙なんて無いんだよ。精々、神様転生でもして主人公になってから来てください」くらい言って欲しい。

「しっかし、毒姫って名前付けたやつセンスいいな」
「それなりにあたしも気に入ってる」
「綺麗な姫にも毒があるってか？」
「それを言うなら薔薇と棘だけどね」
「綺麗だって褒めてんだよ」
……こういうとこずるい。あたし達の間柄は、昔から長く一緒にいるせいか恋人になってもあまり変わった気がしない。でも、春希に褒められるのは別だ。何よりも凄く嬉しいし、他の人が褒めなくても春希が褒めてくれれば、それだけで満足。

「春希、大好き」
「Ｄａｉ○ｕｋｅ……テレレレ～テレッテレテ～♪」
「……素直に受け取って」
「お姫様の仰せのままに……さ、目指すは書店、ジーとしててもドーにもならねぇ、行くか」
春希は、あたしが荷物を整え持ったのを確認すると、手を差し出してくれた。あたしは、あたかも自分がシンデレラのように手をゆっくりと手の上に乗せ、エスコートをお願いする。

「あ、なぁ……一つ聞きたいんだが」
「ん？　なに」

俺は、学校を出たすぐのところで気になっていることを思い出した。一つ、これだけは聞いておきたい。

「凪咲、お前友達できたか？」
「……」
「こら、反応しなさい」
「……」
「一緒に買いに行ってやらんぞ」
「ごめんなさい」
すると凪咲は観念したのか、渋々と言った感じに白状した。

「一人できた」
「お、意外な返しだな」
「でしょ」
「ああ、いや～てっきり俺は、〝先生という友達ができた〟みたいな事言われるとばかり……」
「……」
全てを察した。先程から下を向き、大量の汗を垂れ流す凪咲。実の所、この会話は中学の頃にやっている。その時、こやつは〝黒板はマイフレンド〟とかぬかしたのを覚えていて、まさか今回も同じだったとは……。少し成長したのだと感心した俺の心を返してくれ。
俺の恋人は、本人から聞いたところ「春希さえいればいい。友人不要」という普通なら嬉しい主義を持っている。どうやら凪咲は、良くいる群れる女子を毛嫌いしている。そのせいで高校に入ったはいいが、周りの女子のグループに入らず古典的なボッチとなっているらしい。

「友達作れよ」
「いやだ。春希だけいればいい」
「ばっ……照れるだろ……とか言うと思ったか、昼飯とか一緒に食べる人もいないだろそれじゃ」

「春希がいる」
「俺がいない時どうする気だよ」
「……トイレ？」
この時俺は、静かに悟った。一度も学校を休むわけにはいかないと。

「わかったわかった。俺もお前の友達探し手伝ってやるよ」
「頼んでない」
「俺がやりたいんだよ。で、どんな友達が欲しいんだ？」
「ネコ型ロ〇ットくらい便利な子」
「お前に聞いた俺が馬鹿だった」
どうやら俺の高校生活は変化し、大変になってしまったようだ。主に恋人のおかげで、しかしそれも大事な変化だと思い込ませ、頑張ろうと誓うのだった。

蕎麦屋の息子の日常

うちは一応老舗な蕎麦屋だ。名前は〝さんじゃ〟。働いてるのはうちの両親

そこら辺のファミレスみたいに大きい訳でも、数人しか入れない！みたいな特集を組まれるように小さい訳でもない至って普通の店舗だが、意外と人は来る。……まあ、殆ど常連さんで固定化されてるような気もするが、お客さんに変わりは無いしそれはいいだろう

というか、なんだかんだ言って俺もこの店好きだし。だから時々バイトしてって言われるときはできるだけしてるんだけど……

「おはよ～…ねむ」

「あ、創おはよ、ゴホゴホッ」

「風邪？」

「かも…これじゃお客さんの前に立てないからお母さん今日は寝てるね。早く治すようにするから」

「あー……うん。お大事に」

朝から母親が風邪でダウン。この瞬間、俺のバイトが確定した。折角の休日なのになぁ、ま、仕方ないか

父さんはまだ仕込みをしているらしい。随分時間かかってるんだな、いつもならこの時間なら居間にいるらしい。随分時間かかってるんだな、いつもならこの時間なら居間にいるってのに

そんな事を思っていると、電話の音が鳴り響いて俺の思考を断った。これは店用の電話だ、両親がいないとなると俺が取るのか……ううっ、こればっかりは慣れないんだよなぁ

「……、はい、こちらさんじゃです」

『あ、すみません、予約のお願いをしたいんですけども。今日の１３時から。１８人で』

「きっ、今日ですか?!　……少々お待ちください」

電話を待機モードにし、父親の所に行って事情を説明する。母さんがダウンした事、今日の予約を受けてもいいのかという事――――

正直、俺としては断っても良いような気がするんだけど。母さんがいないって事は戦力はガタ落ちだし、俺と父さんだけじゃそれを満足に裁ききる事は難しいだろうし

ただ、父さんから返ってきた返事は「勿論やる」という即答だった。職人気質の父さんの事だ、そもそも店を休みにするという選択肢は無かったんだろう。速攻で電話口に戻って了解を告げてきた

さて、問題は空いたデカイ穴をどう埋めるかだ。そうだな、仕事量的に2人くらい必要だろう。そして今日暇そうにしてるやつ……

「いやー2人が暇してて助かった!」

「なんで俺が呼ばれた……?」

「それは海斗が暇そうにしてたからでしょ?　よかったじゃないやることができて」

「彩も来てくれてありがと。華やかさ担当として女子も誘おうと思ってたんだ、海斗と一緒にいてくれて一発で済んだよ」

「……っ!　きっ、今日はたまたま偶然で一緒だっただけなんだから!」

少し顔を赤くして反論しているが、少なくとも俺の中でこの2人はセット扱いだ。海斗に連絡したのも若干ここが狙いだったり

事前に用意しておいた予備のエプロンと制服を渡すと、海斗は渋々、彩は制服を「可愛い」と言って奪うように持っていった

因みに2人へのバイト代は1日1杯1週間蕎麦無理というものだ。

……まだ相談はしてないんだけどね

制服に着替えて出てきた2人は中々様になってる

「良いね。似合ってる」
「でしょ？　ほらどう海斗？」
「うん、動きやすいし良い感じだな。普段着にできそうだ」
「はぁ……ソウデスネー」
「なんか、彩も大変そうだな」

小声で言うと彩はゆっくり大きく頷いてるし、海斗はこっち見て不思議そうな表情を浮かべている。心の中で少し同情するぞ……彩

「っておい創。こんな所で遊んでていいのか？　忙しくなるから呼ばれたんじゃねぇの？　俺たち」
「そうだっ！　俺たちは油売ってらんないんだよ！　　全く、海斗がふざけるからだぞ」
「俺かっ?!　悪いの俺かっ?!」
「だろうよ。普通さ、女子に服がどうかってのを聞かれたらそれなりの返しがあるだろうに」

俺は世間に疎い面がある。あんまりニュースとか見ないし、そんなに興味ないし
ただ、それでも海斗のさっきの返事は違うって事くらいは簡単に分かるぞ

「はぁー？　ちょっと彩もなんか言ってくれよ！　　創に――――」
「それはもういいっ！　悪いのは海斗！　ほら、創くん！　私たちは何すれば良いの？　時間そんなにないんでしょ？」
「おっと、そうだった。じゃあ説明するから着いてきて」

店内の構造。注文の受け方、渡し方、支払い、それに挨拶の仕方――

なんだかんだ言ってもやることはしっかり覚えてくれる２人に感謝しつつ、そのまま店は開店の時間を迎えた
迎えたんだが……
「お客さん来ないじゃん！」
「海斗お前、ここが開店と同時に人がなだれ込むような店に見えるのか？」
「いやそれをお前が言うなよ」
「だって事実だし。ま、後で忙しくなるから大丈夫」
「な、なんか意味深で怖いんだけど……あ、いらっしゃいませー！
私、初仕事行ってくるね」

こんな早い時間に来るのはいつも来てくれる人か、偶然通りかかった通行人か。今回は前者だった
ほぼ毎日見るおじさんは彩の接客をニコニコしながら聞いている。どうやら彩は心配なさそうだな

「ほぉー、彩凄いな。初めてでしょ？　初体験でしょ？」
「感心してるとこ悪いがお前もやるんだから。じゃ、俺も行きますかね。健闘を祈る！」
「ちょっ！　置いてくのかよ?!」

午前中は客足も疎らだしほっといて大丈夫でしょ。ほら、自立って大事だし
それにしても３人で働いてるとホント楽だな、いつもの運動量の半分位で済んでる気がする。いっそこの２人マジで入ってくれないかね

さて、時計はもうすぐ１３時。団体様のご到着が迫っている

ただならぬ緊張感は2人も巻き込んで高まってきて、自然と背筋を伸ばしてくれた

「もうすぐだよな」
「うん。18人。今日イチの大波が」
「あっ、外見て！　来たんじゃない？」

小さめのバスが1台に駐車場入ってきた。そしてそこからゾロゾロと人が
開かれる扉の音は俺たちの開戦の合図でもあった

「すみませーん、予約していた者ですが」
「はいっ、いらっしゃいませお待ちしてました。こちらへどうぞ～」

そこからは怒濤の展開だった。注文を受けて厨房の父さんに伝え、完成したそばを運び、食べ終わった皿を片付ける――――これの繰り返し。……お客さんに捕まって会話を振られている彩を何度か助けたり、席が分からなくなっている海斗を助けたりしたけど

このビックウェーブは2時間程続いた。全員が帰った時には流石に俺もヘトヘトで、勿論2人も同様だ
お客さんは店内にいない。机をキレイにしながらだが少し休憩ができそうだ

「いやぁーハードだった。めちゃくちゃハードだった」
「海斗の言うとおりね。すっごい運動したみたいな感じ」
「あはは、ほんとにね。2人に手伝ってもらえなかったら死んでたよ。ありがと」
「あ、水もらっていい？」
「勿論」

海斗は厨房からコップを3つ持ってくると、机に備え付けられているウォーターピッチャーからそれに水を注いだ。海斗は1人で3つのコップを使って飲むような変人じゃない。用意されたこれは俺と彩の分らしく、俺もちゃんとご厚意に甘えることにした
喉を冷たい水が通過していくのが分かるのは相当動いていて、喉も渇いてた証拠。この気配りは流石だと思う。彩も満足そうだ

「体の疲れが取れた気がするよ。流石うちの水」
「そんなの関係あんのかよ?」
「そうじゃなくても……海斗が入れてくれた水だから美味しいよ……?」
「そりゃどうも。さて創、まだ人来るんでしょ?」
「当然。と言っても午前中より少ないだろうし、2人はもう終わっても大丈夫だけど」
「いやいや、ここまできたなら最後までやるって!」
「そう?助かる。なら後1時間位頑張ろうか」

その後も何人かお客さんは来たが、あの荒波を制覇した俺たちの相手ではなかった。まあお客さんが来なくなるのは閉店時間が近いってのもあるんだろうけど
5時を迎えるとうちは閉店だ。春の空はもう暗くなっていて、若干肌寒い風が木を揺らしている
海斗と彩は制服とエプロンから私服に着替えて疲れ切った足取りで帰って行った。今日の疲労具合を考えるに、1週間そば無料制は妥当なバイト代になった気がするな
自分の部屋に戻ってベッドに倒れ込むと、俺にもドッと疲れが押し寄せてきた。瞼が重い。
なんというか……高校生という限りある時間なのに……

「俺は……これでいいんだろうか?」

答える相手なんて存在しない質問は天井に向かって飛んで消えていく。もう考えは放棄して、俺はベッドと睡魔に身を委ねることにした

ゲームの延刻

「よし、３ターンで種火は回れるからあと、１０回はいける」
俺、天谷健誠は朝食のプロテインを飲みながら、某スマホゲームをプレイしている
俺は１６歳、ボクシング部に入っているこの春から高校生１年生である
実は俺は普通の歳だと高校生１年生ではないのだ
なぜなら、あんなこんなで去年、ある重い病気にかかり１年間、入院してそのせいで、留年し
その後、回復力が凄すぎたらしくボクシングしてもなんとも無いくらいまで回復して
今に至るのだ
だから、詠斗、高道海人と英莉星彩とは同級生にして幼馴染なのだ

そんなことはどうでもいいとして
今日は部活がＯＦＦである
なので今日は詠斗、海人とゲームセンターで遊ぶ予定だ
いつもこの２人と遊ぶのだが、最近部活の大会が近くて遊びに行けなかったのだ
昨日ようやく大会が終わり、疲れを取るために休みなのだ！
本当に楽しみだな
集合時間はあの壁時計の時間だとあと一時間あるし、もう少し、ゲームしてるか
と思ってスマホを開くと、それは集合時間になっていたのだ
そうだった。一時間ズレてること忘れてた
こうして、俺は遅刻をしました（・、ω・、）？

遅刻をして集合場所になっていたゲームセンターの近くであり、学校の近くでもある駅に行くと、

「遅いわよ！」と英莉星彩の声が聞こえた
あれ？彩⁉
「つかぬ事を聞きますが彩なんでい……」
と言おうとした時、また次の言葉が飛んでくる
「いや～１０分も遅刻とは何事じゃー」
と確か詠斗のクラスメートの日比谷実音という人が突っかかってきた
え？実音⁉
「てか、実音、５分前に来たお前が言えることじゃないからな」
と海斗がすかさず実音という人につっこむ
「え～と？まず、遅れてごめん
あと、何で彩と実音という人がいるの？」
ようやくして、言葉を放つことに成功
「えっと、実音の奴は知らんが、健誠、彩、お前が呼ばなかったのか？」
「そうよ！健誠、あなたが誘ったんでしょ！」
と海斗と彩がそう言った瞬間思い出した
「忘れてたわｗｗｗ」
「忘れるなよ」
「その間、ずっと海斗と２人でいれたから許すけど…／／／」
「って、俺、知らんってなんなだよ！
あと、実音という人やめてくれない⁉」
実音という人がそんなこと言ってるけどそんなことは知らない
知らないというのは恐らく、詠斗が誘ったのだろう
あと、彩が顔を赤くする時、海斗が目をそらす光景も目の当たりにした
最近この２人はいつもこうだ
いつもは彩はデレて、海斗は鈍感だったのだが、
先々週くらいからか海斗も少しずつデレてきている
……お前ら、もう付き合えよ
それはそれこれはこれ、今はもっと重大なことがある
「てか、詠斗（あいつ）来てないな」

そう詠斗がまだ来てないのである
けど、安心しよう詠斗が遅れてこないことは1回もないのだ
もし、時間通りに来たらそれは……
言わないでおこう

それから１０分後がたった
「来ねぇーー!!」
なんと詠斗は来ない
「本当に来ないんだけど、詠斗なんで来ないよよ!」
「腹減った」
彩は痺れを切らしていて、実音という人は腹減ったといってバナナを食べている
まさか、ここまで来ないとは思わなかった
「あいつ、寝てるのか、少し電話してくるから待ってろ」
そう言って海斗はスマホを開いて、詠斗に電話をかけた
そこから3分後
「出たか?」
「出ない、だめだ」
実音という人に尋ねられた海斗はそう答えた
出ないって本当に詠斗何してるんだ?
「どうするの?」
と彩が尋ねる
「いや、しばらく待ってみるか、あいつの事だ家で呑気に飯でも食ってるだろう」
そう海斗が答えた
俺もそうであると信じたい
俺がそうであったように
しょうがないから、人間観察でもしてよ~と
「気持ち悪いからやめた方がいいわよ」
と彩は言いながら、海斗の腕を掴む
え?彩なんで俺の心の中読めたの?

「嘘だよ嘘、ん？」
俺は何か後ろに二人くらいいるのを悟った
「どうした叫んたり、イライラして？」
「あれ？アニキに、凪咲さんではないですか」
それは春希（アニキ）さんと毒姫こと、同じクラスの凪咲さんだった
「いや、健誠、学年違ってもお前、同い年だろいつもだけど同い年がアニキって、言うのやめてくれない？」
とアニキはいうがそんなことは知らない
凪咲さんはアニキの腕をしっかり掴んでいる
そう、彼らは付き合っている
しかし、その事は俺たちのメンツしか知らない
それ故か凪咲はいろんな人々から告られる
まぁ、ここのメンツみんなみんな美男美女しかいないからな（特に海斗とか彩とかね）
「春希、どっかお出かけか？もしかして暇か？」
と海斗はアニキに話している
「あぁ、本屋に行くんだ。凪咲が買いたい本があるか」
確か、凪咲さんは小説を結構見てたな
はっきり言うと俺も小説は好きだが、
凪咲さんが好きなのはラノベという俺の未開のジャンルなんだっけ？
ラノベは詠斗に勧められるんだけど、俺は歴史小説が好きだから板に合わないんだ
そんなことはほっとこう
「そか……俺たちはk「春希、ちょうどいいや！、一緒にゲームセンター行かね？」
おい、実音！人が話してる最中に割り込むな！てか、さっきの春希が言ってた話聞いてたか！」
海斗の話している最中に実音という人が話した
海斗たぶんこの人が聞いてない理由、多分バナナ食ってたからじゃないかな

「ねぇ、春希、この人おかしいね」
そして、凪咲のこの毒姫が発動した
この毒姫という名の由来はこの毒舌から来ても過言ではない
「それはいっちゃいけないよ凪咲ちゃん
実音は元々バカだけど」
あ、それは言わないお約束って奴を言いやがったぞ
毒よりもひどい槍を実音という人に投げたぞぉ！
「おい、それはひでぇー!!俺は天才だぞ！」
それに反論する人がいる
恐らくこの人の天才とはみんなから見ると馬鹿と同じなんだろうと思うな
「英莉星さん、あなたの言ってることはそう見たいね」
そして、さらに凪咲さんが息の根を止めにきている
これはもう
「実音という人、残念だね」
しか言えない
「健誠よ、君は俺と同じだと思ってたのにぃ～」
「それは無いです。死んでも認めたくないです」
「えっ……即答…」
確かに俺も勉強は出来ないけどこの人とは一緒にされたくない
「よく行ったな健誠ｗｗｗ」
「春希、早く行かないと売り切れちゃう」
と凪咲さんはアニキの袖を引っ張りながらそう言った
「分かってるよ凪咲、そうだ！さっきの実音の話、凪咲が本を買ったら、行くよ」
それに気づいたのかアニキはそのまま駅前の書店てと歩き出した
「そうか、じゃあな」
そう言って、アニキたちと別れた
そこからしばらくすると違う声が聞こえた
「悪い～遅れた～」
「遅せぇ!!!」

その声の主は詠斗だぁ
その声と同時に詠斗の怒号がとんでる
ようやくして、詠斗がやって来のだ
「全く、1体何をしてんだ？」
「いやぁ、アニメを見返してたら、寝落ちしててさぁ～」
と詠斗
これはいつもとの事なんだ
「つまり寝坊だろ」
「はい」
海斗が詠斗に毒を指す
「呆れた」
さらに彩も毒を指す
「あきれたとはなんだぁと！」
しかし、詠斗は反論した
「だっていつもの事じゃない、健誠はゲームして、詠斗はアニメを夜通し見てて、
もう少しは反省しなさい!!」
「はい、すみませんでした以後こういうことがないように気を付けます」
詠斗と俺は論破された
なんで俺も謝まってんだろう？
てか、なんで論破されてたっけ？

そんなこんなで俺達はようやくゲームセンターについた
「なぁ、詠斗、寝そべりあったぞ!!」
「まじか！、取りに行くぞ！彩!!」
「なんで私なのよ!!」

「彩、これで！」
「わかったわよ！」
と言うたわいない会話がクレーンゲームの前で続く
俺は何故かそれを眺めていた
「どうした？そんな懐かしい～とか思った顔をして」
その後から海斗が声をかけてきた
「そんなように見える？」
「そうだな」
「なんか、ここ最近、部活が忙しいかったから、こういうの久しぶりだなーって」
「いや、高校で部活やってまだ3ヵ月前後だろ」
「バレたw？」
「バレるわそんな嘘」
「だよね」
とたわいない会話をしていると
クレーンゲームの方から
「これマジやべぇって、
海斗の好きなキャラのやつだぜこれ！」
詠斗たちの声がする
「おい、まじかよ！おい、健誠行くぞ！
金を回せ！取りに行くぞ！彩!!」
「え？待てよ～」

人間五十年、下天の内をくらぶれば夢幻の如くなり
これはかの有名な織田信長が桶狭間の戦いの前に謳った敦盛の歌詞の一節だ
この意味は人間の一生など所詮は５０年にすぎない。
天上界の時間の流れと比較したら、まるで夢や幻のようなものだ。
その俺達の人生は夢や幻だ
いつ、その夢や幻が終わるかわからない

そして、俺達の青春は夢と幻の時の一欠片だ
このひとかけらは決して終わりを迎えてしまうけれども、この一欠片の思い出は下天の時間の長さよりもずっと遠くまで色褪せることはないだろう
だからこの一欠片だけは俺は大切にしたい
もっと詠斗たちと過ごしたいと
俺はそう心に刻みながら、クレーンゲームに1歩足を踏み始めた
「なぁ、海斗～俺が取ってやるよ～」
「「だめだ」」
即答でクレーンゲームにたかっていた男子3人から応答が帰ってくる
「絶対にお前にやらせはしないだって
お前、クレーンゲームが苦手だろ
てか、そこで立ってろ」
と海斗
「これは戦場だ!!
お前にクレーンゲームをやられるなど先に戦死が決まったも同然だ!」
と詠斗
前言撤回だ　ひとまず、こいつらをぶっ叩きたい！

オタクたちの日常

ピピピピピ……
昨日寝る前にセットした目覚まし時計がけたたましく鳴り響く。
電子音が僕の脳を直接刺激し、それによって僕は夢の世界から一気に現実へと引き戻される。
こんなに嫌な音を鳴らす物体を毎晩セットするなんて人類皆ドMなんだろうか……？
そんなことを考えながら諸悪の根源へと手を伸ばす。
「――バンッ！」
目覚まし時計の電子音と、それを止めるときの自分の手と目覚まし時計がぶつかる音がとても不愉快なハーモニーが奏でる。
あぁっ、くそ！なんで僕はこんな早朝に起きることになったんだ!?
自分が伸ばした手の先をみると、そこでは短針が数字の「5」を指し、長針は真っ直ぐ空に向かって伸びていた。
ふあぁ……眠い。眠いけど、僕にはやらなければならない事があるんだ。
そう自分に言い聞かせて、重い腰を上げて部屋を出てリビングへと向かう――。

☆☆☆

日比谷　実音の朝は早い。
今日はいつもより早く起きていたが普段もだいたい六時前には起きている。
そして彼の普段の行動はいつも決まっていて何時に起きて、なにをし、どこへ向かい、何時に帰ってきて、何時に寝る。日々の生活がルーティンとなり、彼を支えているのである。
そのせいか、中学生時代では

「実音を見てるといま何時かわかりやすいよね～。時計みたいｗｗ」
などと言われたことさえある。バカにしてんのか。
ただ僕は現状維持って言葉が大好きなだけだ。僕は日常に変化を求めていない。何が起こるかわからないって言うのはやっぱり怖いというか不安というか……。
だから僕は今が続いてくれることを切に願っている。今が大好きだから。
しかし困ったことに高校に入学してから出会った彼らは彼らは僕の日常に変化をもたらした。

「おっ、実音来たな！遅いぞー！」
「詠斗……お前はなんでこういう日だけ時間通りに来るんだ？」
わかっていたとは思うが彼らとは、秋原　詠斗とその仲間達である。まぁ今回は用事が用事なのでいるのは詠斗のみであるが。
「そんなの当たり前だろ？なんたって今日は同人誌の即売会なんだからな!!」
「詠斗のそういう欲望に忠実なところは尊敬に値するよね……」
そう、今日は僕と詠斗が好きな……いや好きどころではないな、崇拝してるいっても過言ではないほどの同人サークルの販売会があるのだ。
場所は幕張メッセ。場所がだいぶ離れているため、こうして早朝に集まったのだ。
「いや～、それにしてもホントに創と海斗はつれないヤツらだよな」
「仕方ないんじゃない？興味ない人からしたら、あそこはただの臭くて蒸し暑い場所なんだし」
「あぁ、納得。たしかにそうかもな～」
そんな他愛もない会話をしながら、幕張行きのＪＲに乗るために僕達２人は駅へと向かうのであった。

☆☆☆

コミケ。人はそれを戦場と呼ぶ。
数々の同人誌サークルが火花を散らして自分たちの作成したマンガを、より多くの人々に読んでもらうために大声で呼び込みをしたり、奇抜なファッションやコスプレで人目を引こうと躍起になっている。
そしてそれに呼応するかのようにオタク達も物凄い盛り上がりを見せる。
自分の好きなサークルの同人誌を巡って闘争を繰り広げ、好みの作品のコスプレイヤーさんを見つけようと情報網を張り巡らしては、その網にひっかかった獲物を撮って、撮って、撮りまくる!!
そんな会場の様子は確かに戦場にしかみえない。

そんな戦場の中心で僕達は既に戦いを始めていた――!

「すいません!これと、これとぉ～、これ!1冊ずつください!!」
「あいよぉ!!これでこの作品は残り1冊だよ、さぁ買った買った!!」
「俺によこせ!」
「いや、俺だ!!」
僕達が狙っていたサークルはとても人気なようで、僕達が来た時には既に人がアリのように集まっていて激闘を繰り広げていた。
その渦の中に僕と詠斗も決死の覚悟で突撃した……のだが、いつも教室の隅っこで読書してる系男子、通称「ネクラ」の僕にとってその場所は死地であり、あえなく敗退したため遠くからまだ闘っている戦友を見守っているのだ。
「その本はぁ……俺のもんじゃぁぁぁぁあーっ!!」
「うおっ、なんだこいつ!?」
「くっ、また強敵が現れたか……!」
戦友こと秋原　詠斗という名の男はひ弱な僕と違って、多くの人波を押しのけて奥へ奥へとどんどん進んでいく。
「うっしゃぁ!もう、少し……どけぇ!」

「きゃあっ」
詠斗がもう少しでお目当ての同人誌に手が届くその瞬間、なぜか聞きなれた声が僕の耳に届いた。本人もそれに気づいたようで声がした方へと振り向く。
そこにいたのは――
「ど、ど……毒姫えっ!?」
「ちっ、なんでこんなところにいるのよ……」
僕達の通う高校で一番美人であると謳われている、蒼井　凪咲さん、通称『毒姫』その人だったのだ。

『毒姫』

うちの高校の生徒でこの名を知らない人はほとんどいないだろう。
入学式のときに、新入生でとても美人の娘がいるだとかなんとかで有名になり、その後は告白したがこっぴどく振られた人が続出したことで学園中の話題となっていたのだ。
いまでも面白半分で告白を試みる生徒もいるらしい。
が、しかし。
その裏の顔は非常になんというか……こう、残念である意味僕達の中では有名である。
彼氏である大矢根　春希の前では常にデレデレ、春希さえいればそれでいいみたいな思考回路の持ち主であり、更にはオタク。それもディープな。
いわゆる俺ＴＵＥＥＥＥ小説が好みで、１度だけ毒姫がオタクかもしれないという情報を手に入れた詠斗が声をかけに行って絶句して帰ってくるという珍事件が起きたことがある。
まぁ、その事件をキッカケに春希や凪咲と話すような仲になったのは別の話だ。
と、まぁこんな感じでそれなりに話す仲ではあるのだが、実際に僕と凪咲の仲ははっきりいって良くない。
というのも、１度だけ僕が彼女に

「ねぇ、今日のパンツは……そうだな、俺の予想だとランジェリーだと思うんだけどあってる？」
と、聞いたところ、ぶん殴られたという苦い思い出があるのだ。
僕のその時の予想は当たってたみたいで、更には隣に彼氏である春希がいたため、余計に強く警戒されているのだ。
「ねぇちょっと、こっち見ないでくれない？　貴方の視線、不愉快なんだけど」
と、まぁこんな感じだ。とにかく俺のなすこと全てに対してこうして文句をつけてくる。先に言っておこう、この娘はツンデレではない。つまり僕への暴言は全て本音なのだ。めっちゃ悲しい。
だが伊達に僕も真性Mなどとあだ名を付けられてるわけじゃない。こっちにだってそれなりのプライドはあるのだ。
「ははは、そんなに僕に見られるのが嫌なのか。じゃあ更に！舐めまわすように！観察してあげるよ!!」
「実音、その辺にしておけ。周囲の人たちが携帯を準備してる」
「おっと、いいところだったんだけどなぁ……って詠斗、ようやく買えたか」
戻ってきてから毒姫と僕の言い争いを仲裁した詠斗の手にはお目当てだった同人誌が3冊ほど握られている。
「おう、なんかあそこの人たちが俺をライバルと認めてくれたようでな。店員さんも俺のガッツに感動したとかなんとかで1冊オマケにくれたんだ。つーわけで、これ凪咲にやるよ」
そういった詠斗の手には僕達が買おうとしていた同人誌と同じものが握られている。
「いっ、いいわよ！自分の糧くらい自分で手に入れるわ」
「まぁまぁそう言うなって。さっきは少しだけアンタのこと押しのけちまったみたいだしな、そのお詫びだ」
「そ、それなら仕方ないわね。せっかくのお詫びなんだしいただくわ。ありがとう」
少しだけ上から目線でものを言う毒姫の顔は、言葉とは真逆にちょっとだけ照れくさいようで赤くなっている。

「よしっ、じゃあ早速みんなで読んで感想でも語り合おうぜ！」
「そうね、ここのシーンの主人公のセリフは私好みでいいわね」
「「読むの早っ!?」」
僕達まだ開いてすらいないんだけど……。毒姫めちゃくちゃ楽しんでるじゃん。
まぁ、こうやってみんなとくだらない時間を過ごすっていうのも悪くない。
楽しい「いま」が続いてくれるといいな……。
そんなことを考えながら再び語り出した毒姫と詠斗の談笑に混ざるために同人誌へと目を落とした。
うん、やっぱりこの先生の同人誌は面白い……！

キャンプと失態と恋心

もうすぐGWを迎える私達は休日は何をしようと考えていた頃、それは突然の事だった。
「キャンプ？」
「そうよ。GW中に1泊2日で行ってらっしゃいな」
「誰と行けばいいのよ」
「海斗君誘っちゃいなさい」
「な、なんでそこで海斗の名前が出るのよ！」

それは夕飯時だった。今日は帰りが遅いお父さんをほっといて2人で夕飯を食べていた。その時にお母さんからキャンプの話が出てきていた。でも、海斗かぁ……。海人とキャンプに行ってあーんなことやこーんなことを……、えへへ♪
「あらあら、にやけちゃって♡」
「そ、そんな事ないわよ！」
おかしい。何故お母さんは私の心を読んでくるのかしら。そう易易と心を読まれるのは肉親とはいえ引いてしまうわ……。でも、キャンプはいいかもしれない。健誠くんも誘っていこうかしらね。
「分かった。GW中に行ってくるわ」
そう言って、私は海斗にこの事を話すために自分の部屋を戻ろうとした。その時、お母さんから呼び止められた。
「彩」
「な、なによ」
「お母さんのあるけどいる？　ひにｎ」
「いらないわよ！」
お母さんったら！　私にまだそういうのは早いってのよ！
……でも、海斗となら……。
今日の夜はその事でモヤモヤして、結局キャンプのことを話したのはその翌日だった。

☆☆☆

「で？　創くんはともかく、なんで詠斗がいるのよ！」

「なんだよ！　俺が来ちゃダメなのかよ！」

今、俺たちは駅前に集まっていた。彩からの誘いで、俺、彩、詠斗、創、健誠、実音の６人でキャンプに行くことになっている。健誠は彩が　俺は詠斗と創と実音を誘ったのだが……そういや、こいつら仲悪かったな。でも、たまに協力する素振りを見せるから仲は良いのか……？　どっちなんだろ。

「そんなことより、早く行こ？　健誠も待ちくたびれてるよ？」

「そうだぞー！　食料しかないとはいえ重いんだからなー！」

「それはジャンケンに負けたお前が悪いんだよ」

創が声をかけ、健誠が愚痴をこぼす。今から電車に乗り、バスを乗り継いでキャンプ場へと向かう。テントなんかはおばさんの知り合いの人が用意してくれるらしい。これは楽で助かるってもんだ。さて、電車に乗ってキャンプ場へと向かうとしますか。

と、ここで何かを思い出したかのように創が言う。

「……ところで実音は？」

「「「あ……」」」

哀れ実音。わ、忘れてたわけじゃないんだからねっ！　でも、おかしい。９時に駅前集合になっていたはずなのだが……。

「ま、いっか」

「そうね。早く行きましょ」

こういうのは遅れる方が悪い。ただでさえ今日は早起きだったんだ。少し辛辣にいかせてもらうよ。彩も彩で朝早くから起こしに来るし……。強く出れないのは確かなんだけどさぁ……。

「そうだな、行こうか」

「え!?　実音はどうすんの!?」

「勝手にくるだろ、勝手に」

どうやら創も同じ意見だったらしい。こういう時の創は一番冷たいからな。

と、どうやら実音が来たようだ。

「はぁ……はぁ……。スマン！　遅れた！」
申し訳なさそうな顔で誤ってくる実音。こいつがここまでの反応を見せるのは珍しい。恐らく本当に反省しているのだろう。今回くらいは許そうと、俺は実音に声をかけようとした。すると創が前に出てきて、笑顔でこう言い放った。
「焼き土下座ね♪」
「「厳しすぎるッ！」」
俺、詠斗、実音。心からの叫びである。心が叫びたがってるんだッ！　って、そうじゃなくて……。というか、彩と健誠はポカンとしてるよ。意味わかってないなありゃ。
兎にも角にもだ。メンバーが揃ったことだし、そろそろ行くとしますか。
「それじゃ、キャンプ場までれっつらいどー！」
「「「「おー！」」」」
かくして、俺らの大波乱のキャンプが幕を開けたのだった。
☆☆☆
キャンプ場に着いて、早速問題が発生した。いや、テントなんかは既に建ててあるし、寝袋なんかの準備もとうに終わっているのだけれども……。
「食料がないー!?」
「そうなんだよ！　どうするッ！　これは自分たちで調達するしかないよなそうだよなァ!!」
妙に高いテンションで健誠が叫んでいた。どうやら食料が無いせいで壊れてしまっているらしい。
……だが、腑に落ちないことがある。食料を用意したのは彩のはずだ。彩はそんなミスをするはずがない。一体何があったというだろうか……。
「あー!!!」
「うわっ！　どうしたんだよ！　彩！」
突然、彩が大声で叫びだした。ん？　ケータイを見てる……？　一体何が……。

「これ……お母さんの仕業だ……！」
「「「「はいいいいい!?」」」」
　事の顛末はこうだ。昨日の晩におばさんが食料は自分が用意すると言っていて、彩はそれを任せたそうだ。ん？　持った時に気づくだろって？　……大量の保冷剤が入っておりました……。ブロック型の……。いや、それでも普通気づくでしょうに。まぁ、今回は彩には責任はない。彩を責めるのは酷だろう。それぐらい、ここにいる全員分かってる。……分かってるよなぁ!?　特に実音！
「何で気づかなかったんだよ！」
　実音んんん!?　何言ってんの！　そんな事言っちゃ、責任感が強い彩は……
「ごめんなさい……私のせいで……」
　泣き出してしまった。罪に罪を重ねるのか貴様はぁぁぁぁぁ!!!
バカだから仕方ないとか言えねぇぞ！
「実音……？」
　とりあえず睨みつけておく彩が泣いた時、黒い感情みたいなのが湧いてきていた。なんでから知らないんだけどね。
「な、なに……。忘れたのは彩の責任だろ……？　僕は悪くないぞ……」
「それでも泣かしただろうが」
「いや、それは彩が――」
「黙ってろ、ぶっ殺すぞ」
「――ッ!?」
　俺は彩の頭を撫でる。もう大丈夫だと安心させるために。
「よ、よし！　それじゃあ俺と詠斗は川へ！　健誠と実音は山へ！
それぞれ食料を取りに行こう！　海斗と彩はここに残って荷物を見ててくれ！　んじゃ行くぞ！」
「スマン……創」
　創が仕切ってくれたお陰で、少し落ち着くことが出来た。後で実音に謝らないと……。でも、それよりもやらないといけない事が俺にはある。それは目の前の幼なじみを泣き止ませることだ。現に彩は今

でも泣き続けていた。もう、そんな姿は見たくない。一体どうしたものかと思ったが、ある時に詠斗から教えてもらった方法があった。そうだ、これを試してみようと俺はそれを行動に移すことにしたのだった。

☆☆☆

私のせいだ……。私のせいで海斗達が喧嘩をしてしまっている……。実音だって私は少し苦手だけど海斗にとっては大切な友達。そんな人にあんな言葉を吐くなんて動揺してるのはあんたの方じゃない、海斗。

私は海斗にあんな言葉を吐かせてしまった事とキャンプを食料がないというトラブルを引き起こしてしまったという……なんというか責任感みたいなもので押しつぶされそうになっていた。

たかが遊びのキャンプ。そう言ってしまえれば楽なんだけど、少なくとも私にとっては遊びではなくとても大事な事だった。私に友達を紹介してくれた海斗に、詠斗達だって普段はあんな態度とってるけど私にとっては大事な友達なの。その事を感謝したいが為にキャンプの話に乗ったのに……。涙が止まらない……。ダメだなぁ、私。

「彩」

自己嫌悪に陥っていたその時だった。私の背中にふわっとした、それでいて力強い何かが抱きしめてきた。直接姿を見なくてもわかる。海斗だ。

私はそれを理解した瞬間、どんな顔をしたのだろう。いや、客観的に見なくても分かる。顔は真っ赤になっているでしょうね。

不思議ねー。人間って予想外のハプニングが起こると普段とは違う行動を取るらしいけど、まさかこうなるとはねー。あははー。

「彩、悪気がなかったのは分かってるし、彩がこのキャンプを楽しみにしていたのも知ってる」

考えバレてるし。なに？　普段鈍いくせにこういう所は鋭いの？

「だから気に病まないでくれ。俺はお前を泣かせたくないんだよ……」

――――――――――えっ？
え、え、え、え、え、え？
その瞬間、私の意識は顔の熱さと共に失ってしまった。
☆☆☆

あ、あれ？　詠斗に教えてもらった方法で彩を励まそうとしたらなんか気絶したんだけど？　え、どうしよ。でも、なんか幸せそうだしいっか。
俺はそう思いテントの中へ彩を運ぼうとすると奥から詠斗達が食料を持って戻ってきていた。
「お、お疲れ。じゃ、調理にｓ」
「その前にリア充の調理だな」
「「オゥケィ」」
目からハイライトが消えた友人３人がいる件について。あ、これやばい奴やん。
「け、健誠……？」
とりあえず、頼みの綱として健誠に救難信号を出しておく。……結果は見えてるけど。
「ゴメン、止めらんない」
「ですよねー！」
「あ、逃げたぞ！　追え！」
逃げるが勝ち。俺はその場から脱兎の如く勢いで逃げ出した。当然、詠斗達も追いかけてくることとなる。走りながら考えるけど、なんであんな怒ってるんだろうと俺は思い、声をかけようと走りながら後ろを向く。
すると
そこには鬼が３体いた。
「大人しくミンチにされろやー！」
「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」
「僕だって……僕だってー！」
「もうやだこれー！」

その日のキャンプ場には悲鳴が木霊したらしい。後から聞いた話だが、そのキャンプ場では後に鬼が出ると度々噂になったそうな。
その後、俺がどうなったかは任せる。……結果は予想の通りだけどね。
この後、1泊した俺らは無事に街へと戻ってくることが出来た。その道中、彩とは一言も会話することがなかった。どうやら彩が俺のことを避けているように感じた。……俺の心にポッカリと穴が空いたように感じたのも同じ頃だ。
一体これはなんだろうか。
普段通りの日常が戻って来た。そして、GW終わり間際、俺が自宅にいる時に詠斗が突然こんなことを言いに電話してきた
『おい！　勉強会やろうぜ！』
大波乱の予感しかしないんですがねぇ！　私はぁ！
こうして俺達はキャンプの次に勉強会をやる事となったのだ。
何がどうなってこうなったのやらと俺はスマホを耳から離し空を見上げて、はぁ……とため息をつくのだった。

真也の策略（？）

「助けて、あかねえ！」

「え、いやよ」

「えっ……」

……上杉真也１５歳

ただいまピンチです。

～～～～～～～～～

「で、どうしたの？」

「その～……勉強教えて下さい！」

「……はい？まだ授業も始まったばっかりで中学の内容とさほど変わらないでしょう」

「それが、春休みにサボったせいで入学してすぐのテストが悪すぎて再テストにされました……」

自分がサボったんです。悪いんです。

でも、半年やらないだけでこんなに出来なくなるものって定着してなさすぎだろ、自分。

「ちゃんと勉強してない真也が悪いんでしょ？私は関係ない、以上。私は用事があるから帰るわ」

う、不味い……！これでは、今週末の再テストに間に合うかどうか……悪いね、あかねえ。アレを使わせてもらう！

「ま、待って‼」

「な、何……？」

「僕を助けて……」ウルウル

（あかねえであろうと女子であることに変わりはない。ならこういう上目遣いに弱いはず……！ここで堕ちてくれないと僕の学力が危うい！）

堕ちる、誤字に非ず。
校門の前で静寂なる戦いが行われる。一方は上目遣い、もう一方は……少し引くような目で。普通ならうぶなカップルみたいに思われるが、この空気の中ではバチバチとお互いの欲望がぶつかり合っている。まさに冷戦状態である。
「はぁ……分かったわよ。ただし、教えるのは一時間だけ。ほら、図書館に行ってさっさと終わらせるわよ」
「ありがとう、あかねぇ!!」
我ながら酷いと思う。相手の弱みに漬け込んで自分だけの利益を得る。だけど、こうでもしないと戦い《再テスト》は戦い抜けない。生き残れない。これからの高校生活が危うい！だから、悪いけど犠牲になってもらうよ。
〜〜〜

「真也。あなた、バカなの？」
「これでも真面目にやったんだよ！」
「英語はまだ救いようがあるわ。それなのに、現代文のこの様は何なのよ‼」
「仕方ないじゃん！地歴みたいに暗記じゃないし、化学みたいに反応起きないしさ！紙の中の人の心情なんて分かるわけないじゃん！」
　僕のテストを見て呆れているあかねぇに僕は声を荒げて反論する。すると、声が大きすぎたのか図書委員から注意されてしまった。
「……アンタ、勉強してないでしょ？」
「うえ⁉あ、いや、その……」
「中学の頃は点取れてたのにねぇ……遊びすぎじゃないの？」
「地の聖隷が僕を呼んでいて……」
「くだらないこと言ってないで。ほら、早くやるわよ」
　そう言われ、テキストを広げる。
　高校の教科書か……。見ただけでも目眩がする。
「で、高校の内容に入っていないのにこの点数は何？」
「えっと……」
「どうせ余裕ぶっこいでて受験勉強もろくにせず一年間遊び呆けていたんでしょ？そりゃこんな点数にもなるわよ
　よくこの学校にノコノコと入学できたものね」
「うっ……」
「宿題も答えを写して終わり。そんなとこなんじゃないの？」
　全部見透かされてた……。
「それで分かんないところは？」
　あかねぇはそう聞きながら後ろの髪をゴムで束ねる。
　僕さ、たまに思うんだけど……女子高生（美少女に限る）の髪を束ねる仕草って可愛いよね。
「分かんないところは……全部です」
「……分かんないところが分かんないじゃなくて？」
「分かんないところは分かってる。……全部」
「どんだけ遊んでたのよ‼いいわ、みっちり教えてあげるから覚悟し

ておきなさい！」

1時間後……

「なにっ!?ここで……こんな場面でルンバを稼働させるだと!?くっ……そんなこと、そんなことさせるかよぉぉぉぉーっ！」

「バカなこと言ってないでよほんと……」

2時間後……

「お、終わったぁー……」

「ま、こんなとこね。このくらい覚えとけば再テストは余裕で受かるわ」

勉強会しからかれこれ2時間。公式、文法、単語の意味など、短い時間の中でみっちりと教えられた。久々にここまで集中した……。流石に1年間のブランクはキツかったみたいだ。

「ん?おう、真也じゃんか」

「え、あ、えっと……健誠、さん?」

突然、声をかけてきたのは同級生の天下谷健誠さん。去年、大きな手術をして留年してしまったらしい。年上ということもあって少し接しづらい部分もある。

「ハハ、同じクラスなんだから『さん』はやめろって。健誠でいいよ健誠で」

「あ、じゃあ、そう呼ばせてもらいま「敬語もなしな?」……はい」

「ほら、返事から」

「う、うん……じゃ、じゃあ……」

「じゃあ?」

「ケンチー?」

「ひっぱりハンティングかい……ま、気に入ったしいいか」

知的を思わせる彼の眼鏡姿は普通の女子を魅了するという。普通の女子を。うん、普通の女子を。これ以上は言わないから察して。

「ところで、ケンチーはなんでここにいるの?」

「あー、北条先生から頼まれてさ。教材の出し入れを手伝ってくれって」
「あ、そうなんだ。そういうことなら僕も手伝おっか？」
「お、マジで!?ありがとな！」
　ケンチーの手伝いをすることになった。ということは、あかねぇに礼を言って別れないと！
「あかねぇ、そういうことだから先に帰ってていいよ‼」
「年頃の女子をこの時間に一人で帰らせる気？」
「……あれ、友達は？」
「帰ろうとしてるところをわざわざ引き留めて勉強に付き合わせたのはどこの誰だったかしら？
　それに、そもそもこの時間までさすがに友達も待ってないわよ。」
「あっ…そ、そうだね。じゃあ、待っててくれる？」
「もちろんよ。ここで勉強してるから終わったら声かけて」
　うん、分かった。と返事をしてケンチーの方についていく。あのあかねぇが残ってるということは……うん、嫌な予感しかしない。
　～～～～～
「それでさ……その女の人がさ……あ、そこにゴキブリいるから。それでさ……」
「ゴキブリの情報をさらっと流さないでくれるかな!?僕、虫嫌いなんだから‼」
「なんだよ、昆虫博士みたいな顔してるのに」
「顔は関係ないだろ!?」
「悪ぃ、悪ぃ。前の学年では日常茶飯事でさ、まだ抜けきれてないんだわ」
　前の学年……留年したっていうことで今のクラスの皆はバカにしている。僕は本人から事情を聞いたから何も言えないけど……。癖が抜けきれてないっていうことは、やっぱり寂しいのだろうか？
「ね、ねぇ……」
　ケンチーは寂しくないの？と言おうとした瞬間に1つの思考が脳裏をよぎる。出会ってまだ2週間の人間が言えることか？それはた

だの同情になって相手に失礼じゃないか?と。
「ひ、人に嫌と言われた事はしちゃダメなんだ。しちゃうと絶対に後で自分に返ってくるから気をつけてね」
とっさに思い付いた変な説教じみた言葉で会話を紡ぐ。やっぱり、まだ踏み込むべきじゃない。
「ハハッ、分かったよ。ありがとな」
「あ、う、うん……」
〜〜〜〜〜
北条先生に渡すものも渡し、図書室へあかねぇを呼びに言って帰りの準備を済ませて帰路に着く。
こうやってあかねぇと帰るのも何年ぶりだろうか?多分、中1以来かな。
「あかねぇ、何か企んでることがあったら言ってよ」
「帰りにミセスドーナツに寄って帰るわよ。今日のバイト代払ってもらうんだから」
嫌な予感的中……。
「やっぱり、お金は飛んでくんだ……」
「当たり前でしょ?昔みたいにお姉ちゃんが遊んであげるから。ほら、行くわよ!」
「可愛く言っても意味ないってばぁ!」
僕の嘆きは夜の街の喧騒の中へと消えていく。英世は2枚飛んでいった……。
ちなみに再テストは満点合格で逆に先生に怒られた。最初から本気でやれ、と。

青春はレモンの皮の味

あのちょっとした事件が起こったキャンプから帰ってきた翌日、俺は気がかりなことがあった。帰りの道中、彩が海斗と喋らない上に視線すら合わせなかったことだ。

不自然きわまりない。気持ち悪すぎる。

《ぶつからなきゃ伝わらない事だってあるよ……例えば、『自分がどれくらい真剣なのか。』……とかね》

テレビからボクっ娘の音声が流れる。スラッと流れる紫色の髪。あー、もう可愛すぎる！

つーか、ＳＡＯ見ながら考える内容じゃないよなこれ。

《ぶつからなきゃ伝わらない事だってあるよ……》

おいおい、なんでここの台詞がリピート……って、そうか。ここって閃光さんが悩んでるときのだっけ。

（……ん？悩み？伝えたいこと……ぶつかる……。そうか、この手があった！）

いいことを思いついた俺はＤＶＤプレイヤーを手に取り、再生を止める。充電中のスマホを乱暴に取り、すぐさま海斗に連絡を掛ける。

時刻は午後１０時。さて、アイツは出るだろうか？

「……うんー……もしもし？」

「おい！勉強会やろうぜ！」

寝ぼけて電話に出る海斗に考える余地を与えないように早口で伝える。

「……は？」

「明日の朝９時から俺ん家で泊まりでな！久々に集まって遊ぼうぜ！」

伝えることだけ伝えて早々に切る。

なんか、言いたげにしてたけどまぁいいよね。あ、後は皆にも連絡入れとこ。

◇◇◇◇◇◇◇

Q．次の漢字の読みを答え、一つの例文を作りなさい。【国語】

「嬲る」

A．日比谷実音の答え

「ほる」

（ふたりの男は我慢できずに一人の女を嬲った）

C．秋原詠斗のコメント

お前はイチイチ下ネタぶっこんでくるのやめろ

A．秋原詠斗の答え

「なぶる」

（ふたりの男は一人の女を焦らして嬲り続けた）

C．高道海斗のコメント

読みはあってるが、お前はプレイ内容をひっぱってくんじゃねえ！

「賽子」

A．英梨星彩の答え

「さいこ」

（彼女はいわゆる、賽子パスだった）

C．九重創のコメント

読みが惜しかったかな。これは「さいころ」って読むんだ。先生によってはテストで満点を取らせないクズもいるから覚えておくといいかもね。

Q．次の空欄に当てはまる英語を書きなさい。【英語】

「Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ　ｏｆ　ｈｕｍａｎ　ｂｅｉｎｇｓ　ｍａｋｅｓ　ｆｒｏｍ（　）．」

A．九重創の答え

「ｈａｐｐｙ　ｗｈｉｔｅ　ｐｏｗｄｅｒ」

C．英梨星彩のコメント

ここはサービス問題のつもりだったのに……。白い粉、ダメよ絶対。

A．高道海斗の答え

「ｐｌｅａｓｕｒｅ」

C．秋原詠斗のコメント

お前もソッチ系のこと書いてんじゃねえか！何だよ！「人間の幸せは快楽でできている」って‼同人誌とか成人男性向け写真集の読みすぎなんだよ！

Q．次の質問に日本語で答えなさい。【英語】

「Ｗｈｙ ｄｏ ｐｅｏｐｌｅ ｆａｌｌ ｉｎ ｌｏｖｅ？」

A．日比谷実音の答え

「恋に堕ちたと錯覚して一人で過ごす者たちを見下し、嘲笑うため」

C．九重創のコメント

そのひねくれた考えには少し同意するけど、テストでは無難な回答をしようね？

◇◇◇◇◇◇◇

「創ー、まだ終わんないのー？」

「実音、まだ午後は始まったばっかだよ？頑張ろ？」

「……。」

「……。」

「だー！もう文系教科は疲れたー！お前ら、次、理数行くぞ‼」

◇◇◇◇◇◇◇

Q．等加速度直線運動の公式で二乗の文字が入ってないものを答えよ。【物理】

A．英梨星彩の答え

「Ｖ＝Ｖ０＋ａｔ」
Ｃ．秋原詠斗のコメント
　正解だ。基礎中の基礎はしっかりできてるな。これから先、思いもよらない形で使うときもあるから気を付けろよ。

Ｑ．次の空欄に当てはまる日本語を入れて答えよ。【物理】
　光は波であって（　　）である。
Ａ．高道海斗の答え
「切り札」
Ｃ．日比谷実音のコメント
　バーカバーカッ！間違えてるとか恥ずかしいだろｗ
Ａ．日比谷実音の答え
「聖剣」
Ｃ．高道海斗のコメント
　お前も同じようなボケしてんじゃねえか！
※答えは粒子です。

Ｑ．ある一定の条件下で６倍の大きさになる人間の器官はどこか？【生物】
Ａ．男性陣の答え
「ち〇こ」
Ｃ．英梨星彩のコメント
　アンタたちはバカなの⁉答えは瞳孔よ！暗くなると６倍になるの！下ネタばっかり考えてないでちゃんと勉強しなさい！

◇◇◇◇◇◇

「詠斗ー、もう疲れたよー！」
「そう、だな……。あー、疲れた！久々にこんなに勉強した」
「もう勉強したくない……」
「今日もけっこう頑張ったねー」

『うぁぁ……』
男子グループから重いため息が出る。それもそのはず。普段、家庭学習などしない俺たちが六時間ぶっ通しで教えあっていたのだから。
「ごめんね。私、帰る……」
勉強会終了した余韻に浸っていると彩が不意にそんなことを言い出す。やはり、キャンプの件を引きずっているのだろうか？海斗は……声をかけそうにないな。
「やっぱり、私、邪魔でしょ？これからは無理に誘わなくてもいいよ？その……楽しい雰囲気を壊したくないから……」
「な、何言ってるんだよ！そんなことないじゃん！」
「そ、そうだよ。いきなりどうしたのさ？」
人一倍責任感が強く感じられる彩はまた自分を責める。それに対して、実音と創が立ち上がって反論する。
創だけはこちらをチラッと見てきた。……はぁ、そういうことね。
「彩、一回あっちの部屋に行こ？」
実音も何かを感じ取ったのか、彩の肩をガッチリつかみ廊下へ歩みを進めていった。
さて、こっちはこっちで片付けますか。
「……で実際問題、彩とはどうなんだ？」
しんみりとした雰囲気をこの場に残しながら去っていったアイツらに対し、俺は海斗に問いただす。
「……いや、何もねぇよ」
「嘘つくなっつの。今日、お前ら一回も言葉交わしてねえだろ？少なくとも勉強会の間は」
「……分かった。全部話すよ」
そう言った海斗からキャンプの時から何があったのか教えてもらった。
食料詐欺に引っ掛かった彩を実音が問いただし泣かせてしまい、泣き止むことのない彩をなだめる為に格好つけた言葉を言ったら頬を紅潮させて倒れた、と。
メチャクチャ羨ましいわコンチクショウ。ぶっ〇してやろうか？

「オマエハアホカ？その頭はただの飾りか？バーカバーカ！」
「は⁉人が真面目に考えてんだから少しはまともに考えろよ！」
「あ？うるせぇよこの鈍感野郎！少しくらい自分で考えろや！」
「考えてもどうにもならないからお前に相談してるんだろ！」
「じゃあお前の思ってること全部吐けよ！彩にぶちまけろよ！」
「……そんなことして関係が壊れたらどうすんだよ……！もう元に戻れなくなったらどう責任とるつもりだよ⁉」
「……こんなことで崩れるような仲じゃねぇだろお前らは。とっとと仲直りしろ」
そう言い残してその場を立った。キッチンに立ち、飯の用意をする。
あぁ、もうなんでこんな損な役回りしか来ないんだ俺は。自分で仕組んでジョーカーを引くとは運が良いんだか悪いんだか……。
「あとは彩、か……」

◇◇◇◇◇◇

彩が自暴自棄なってしまい、なだめる為に詠斗の部屋を使わせてもらってるんだけど……つくづくオタクだなぁ、って思ってしまう。みかん少女に百合好きピアノ少女にヨーソーロー少女のフィギュア、機動戦士のプラモデル、ポスターなどが部屋一面に飾られている。
話の内容と環境が噛み合わない……。
「その……彩。この前はごめん！」
「……え？なんで、謝るの……？」
「彩の知り合いがいたずらしたっていうのは彩から聞いてたのに責めたりしてごめん！」
ここでそばにいた実音が先日の謝罪。本当に悪いと思ってたのか、この場を乗りきるための材料なのか。ま、実音の場合は前者かな？バカ正直だし。
「いや、謝るのは私の、ひゃ⁉」
彩の言葉を遮るようにして実音は彩の肩に両手を勢いよく置く。

ナイス、実音。って、僕に寄越すのかい！
「彩、落ち着いて聞いてほしいんだけど……キャンプの時、海斗と何があったの？」
「……ふぇ？えっ、あ、うっ……きゅー」
驚きを隠せない彩は一瞬戸惑った。キャンプの失態を責められるとでも思ってたのかな？あと、彩が赤面していくのが分かる。というかもう、沸点越えたんじゃない？
海斗のやつ、やっぱ変なこと言ったんだな……。あそこで調理すべきだったか……。いいや、後で制裁しとこ。
「えっとね、彩？僕たちはね、海斗と彩が心配だったんだよ。いつもバカやって騒いでるけど、見てるところはちゃんと見てる。だから、詠斗も勉強会にかこつけて仲直りさせる場を設けてたんだ」
「うん、それは……薄々気づいてた。けど……」
「けど？」
「海斗を見るとあの言葉が脳内でリピートして……え、えへへ」
笑ってる彩に「どうしたのさ？」と問うと、耳打ちしてくれた。どうやら、僕たちが食料探しに行ったときに言ったらしい。
カイトユルスマジ。ギロチン確定。
「あー……うん。落ち着いたことだし、一回戻ろうか」
「え、あ、でも……心の準備が……」
「ほら、いいから早く行くよ！」
詠斗と処刑方法についても話さないと。

◇◇◇◇◇◇

彩がリビングに戻ってきて1分も経たないうちに、海斗は立ち上がって向かい合った。
「実況は私、日比谷実音と」
「解説は九重創です。よろしくお願いします」
「お前らは何やってんだ……」
ちなみに俺らはキッチンで手を動かしながら談笑している。

「彩！」
「ッ⁉ひゃ、ひゃい！」
「あのさ、なんで、俺を避けてるのは分からないよ？けど、今まで当たり前だった彩との会話が日常から無くなるのはすごい寂しかった」
「お、ここは海斗選手の領域！そこでいきなり、右ストレートが炸裂した！」
「……みかんが喉を通らなかったんだ」
「次はお得意の左フックぅ！」
「しかも皮がキレイに剥けなかった」
相手の目を見て真剣に話す海斗に対し、彩は身体をプルプルさせて震えている。顔も少し赤い。あ、顔あげた。そして、覚醒した。
「あー、もう！我慢できない‼大体ね！なんで、みかんなのよ！みかんみかんうるさいのよ！」
「英梨星彩さんの右アッパーがキレイに決まった！」
それから飯ができるまではずっと聞き耳をたててよく聞いていた。
まぁ、これで仲直りしたのかな？面と向かって喋れるからな。
「「カイト、後で処刑するよ！」」

砂糖大さじ2杯の甘さ

――暇だ。

自室のテーブルの上に積まれたラノベを眺めぼーっとする俺。先程まで読んでいたバトル物がまだ頭に残っているせいか、突然血なまぐさい戦いに巻き込まれないか……なんて物騒な考えまで思い浮かぶ始末。

しかしそんな事を考えてるのは俺だけのようで、俺のお隣に座る彼女は黙々とラノベの世界に没頭していた。

「なぁ、凪咲？　ずっと読んでて飽きないのか？」

「……」

挿絵間近の所で邪魔を入れてしまったようだ。凪咲はバンっと本を強めに閉じると、ジト目でこちらを見ていた。

「飽きない」

「そ、そうか……あの、ごめんなさい」

「許す」

……。

俺と凪咲の間にはちょっとしたルールがある。

〝凪咲が本を読んでいる時にはあまり邪魔をしない〟

このルールについては以前、俺をアニキと慕ってくれる同い年の天谷健誠がやらかした事がある。

その時は、凪咲の怒りを静めるのに数時間撫でる事になった。

「ねぇ、春希？　甘いのと辛いのどっちが好き？」

「んー、凪咲が好き」

「……」

あ、めちゃくちゃ照れてる。なんかこうしてるとバカップルしてるな～って気がする。

「真面目に答えてよ……」
流石に2度も同じことやると凪咲が不機嫌になりかねないので、きちんと答えることにした。

「どうせなら甘い方が好きだな」
「……そう」
すると凪咲はまた読書に戻った。……えっ？　何も無いの？
てっきり俺は「甘いのが好きなら甘々な私でもいい？」とか言ってくれる展開だと思ってたんだが、ただ聞いただけらしい。

「……」
「……」
しっかし凪咲の横顔綺麗だな。文学少女ってよく美人が多いって聞くけど凪咲がいい例になってると思う。まぁ、少し彼氏目線も混じってるけどな。読書中に告白してくる輩が多いのも頷ける。
先日もまた命知らずの先輩が、凪咲の読書中に告白しに来ていた。結果は言うまでもないけど、今思えばまるで磁石みたいだな～なんて思ったり。

「春希は今日どこにも行かないの？」
「いや、行かせまいとする彼女さんはどこの誰ですかね」
「私です」
「正直でよろしい。まぁ、行く宛がないってだけなんだけど」
最近つるんでるみんなは、どこかに行ってるらしい。どうせなら誘って欲しかったが、凪咲が絶対面倒くさがるだろうからもし誘われてたとしても行かなかっただろう。
凪咲を一人にする？　そんな危ないこと出来るわけないだろ。

「ニート……」
「ほとんど同じような奴に言われたくないですね」

「私はちゃんと動いたから」
「お隣の家からわざわざありがとうございます」
てかそれを動いたとは言わない、と付け加える。

「私……ちゃんと動いた」
「よーしよしえらいえらい！」
「ん」
自分が子供扱いされてるとは知らず、頭を撫でられて上機嫌の凪咲。毒姫は意外とチョロいぞ～なんて広めたとして信じるのなんて俺たちの仲を知ってる詠斗達くらいじゃないか？　だからって広めるつもりはない。

頭を撫でてからしばらく経ち、横顔を眺めていた俺は少しの変化を見つけた。何故か熱心に同じページを読んでいるのだ。
どこを読んでいるのか確かめるために、横からチラッと覗くとそのシーンは、兄妹のラブラブシーンだった。バトル物と言ったら主人公ハーレム、その中に必ずいる妹。うちの凪咲、今度はその妹にハマったご様子。

「兄妹とカップルのイチャイチャって何が違うの？」
ほら来たよ。絶対来ると思ったよその質問！　……とまぁ、想像はしてたがどう答えていいか正解が見つからない俺だった。
違いってなんだ？　血が繋がってるか他人かの違いだよな……いやいやこれじゃ全く納得してくれないよな。

「うーん……」
お互いを知ろうと試行錯誤するカップルのイチャイチャと、お互いを詳しく知っていて不安を感じない兄妹のイチャイチャ。でも結局兄妹であれ最終的にはカップルになる訳だし違いってあまり無いのかもしれない。
やっぱり手っ取り早いのは体験してみることではなかろうか？

「と、言うわけで……妹物の作品を集めてみた！」
自室の本棚にあったありとあらゆる妹作品を漁った。中にはもちろんアニメ化してる奴もあればマイナーなものまで揃ってる。
てか、我ながらよくこんなに妹作品があったな……一人っ子の俺としてはやはり妹とか欲しくなったりするもんなんだよ。

「あ、このキャラ……同人誌で見かけた。鬼畜系だったからすぐさま視界から外したけど」
「こらこら、そういう生々しい事言わないの。それを楽しんでる人だっているんだからな（ごく一部だけど）」
「この子も見た」
「お前……一体夏コミで何を見てきた……」
俺の知らぬ間に夏コミに行っていたらしく、行ったことに気づいたのは前に凪咲の家にお邪魔した時、でかい紙袋に入れられた同人誌だった。
中にはごっそり薄い本が詰め込まれていて、まだ全て読み切れてないそうだ。それなのにうちで違う本読んでて良いのか？　と言ったところ「それとこれとは別」などと、まるで女性のデザートは別腹、みたいなノリで返された。

「どれから試してみる？」
「無難にこれじゃないか？」
表紙を捲り、俺たちは文を読み始めた。

□　□　□

「今日は楽しかったな凪咲」
俺たちは落ち着いた雰囲気のカフェで今日一日を振り返っていた。
可愛くオレンジジュースをストローで吸い上げる妹の凪咲に思わず頬が緩んでしまう。

「お兄ちゃんと二人っきりでデートするのは、ずっと前から夢だったの。だから……」
そう言うと凪咲は、テーブルを挟んだ向かいに座る俺の手を両手で包み、前かがみの姿勢で顔を近づけてきた。

「一分一秒でもお兄ちゃんとの時間は無駄にしたくないの。私だけをちゃんと見てて……？」
頬を染めて照れながらもハッキリと口にする凪咲に、内心俺はドキドキしていた。
いつもは無邪気な妹が、今では一人の女性として意識してしまう。
そう、俺たちは恋人同士なのだ。兄妹でありながら……。

「これからは凪咲だけを見つめるよ。俺たち、やっと恋人の関係になれたんだからさ」
「うん……お兄ちゃんはいつも鈍感で、もしかしたらずっと私の気持ちに気づいてくれないんじゃないかって心配だったんだよ？」
「ごめんって……。でも、これからはずっと一緒なんだからさ、ゆっくりでもいいから凪咲の気持ちたくさん聞かせてくれないか？」
「私のお兄ちゃんへの気持ちはいつだって溢れかえってるんだから！　お兄ちゃんがもう無理……なんて言っても止まらないよ」
今まで溜まっていた想いが溢れてきているのか、凪咲は止まることなく想いを口にしていたが、そこで喉が乾いたのか再びストローを口に持っていく。

俺も同じようにコーヒーを飲み、どこか心地の良い沈黙が辺りを包んでいた。
きっとこれが恋人同士の空気というものだろう。

「所で凪咲」
「ん？」
「お前、いつから俺の事好きになってくれたんだ？」
「それはね……えっと」
凪咲は顔を真っ赤にして俯く。しかしすぐさま顔を上げて、
「詳しくは覚えてない。でもずっと好きだった。ずっと……、だからきっと、初めて顔を合わせた時から春希の事が好きだったんだと思う」
そんな真っ直ぐな答えを聞き、俺の顔がカッと熱くなるのが分かった。

「春希はどうだったの？」
「お、俺か……？」
「春希は、いつ私の事好きになってくれたの？」
その時、生まれて初めて言葉がスッと出ていく感覚を味わった気がする。

「俺も詳しくは分からない。でも、自然と好きになってたんだと思う。……た、多分、凪咲から好きって気持ちが伝わってきたのかな……」
最後に急いで付け足したが、イマイチかっこつかないな……。

「そ、そう……」
だが凪咲は何か言うこともなく、かああぁと顔を赤らめ髪をクルクルと指に巻いては戻し、巻いては戻すをモジモジしながら繰り返していた。

「春希……」
「ん？　どした」
「――大好き」
気づいた時には俺と凪咲の唇は触れ合っていた。

□　□　□

「な、なぎ……さ？」
「私の気持ち伝わった……？」
その時、俺は本を読みあっていたのだと思い出す。今の凪咲の言葉、いや……途中から文の読み合いでは無かった。それまで兄妹という設定だったのが、終盤には〝春希〟と〝凪咲〟という2人に変わった。
意識を取り戻した今も、先ほどの凪咲の言葉が頭を過ぎる。当の本人は今、俺の腕にしがみついて顔を伏せている。
「十分伝わったよ」
「……もっと撫でて？」
「もしかしてこれが〝甘いのと辛いのどっちが好き〟っていう回答の結果だったりしてね～」
「……」
図星だったようだ。
「あ～長く喋ってたせいか喉乾いた……」
「私が持ってくる。コーヒーでいい？」

「おっけー。コーヒーの買い置き食器棚の下の……」
「知ってるから大丈夫」
凪咲は俺の腕から離れ部屋を出るとリビングがある下へと降りていった。
その日飲んだコーヒーはとてつもなく甘くて、凪咲によると砂糖は入れてないらしい。
その甘さは、砂糖大さじ2杯に匹敵する甘さだった。

蕎麦とうどんの戦争

「絶対蕎麦だろ！　ここは蕎麦だし！」
「いーや、うどん。何と言おうとうどんの方が上よ。でしょう？　海斗」
「いやー…その、おい創…一旦折れろよ」
「断る」
「おいい！」

蕎麦派かうどん派か。いつかは起こる対立だと思っていた。これは最早きのこ派とたけのこ派、カップ麺しょうゆ派とシーフード派に匹敵するレベルの避けられない戦争だ。蕎麦屋の息子として、蕎麦派を応援する者として、この勝負負ける訳にはいかない…っ！
横では海斗がうな垂れてる。よし、ならまずは冷静になるためにこうなった経緯を整理してみよう

今日は学校で海斗と彩をうちに誘って――

「海斗ー、お、相変わらず彩もいるじゃん。手っ取り早くて助かる」
「どしたの？　あー、もしかして…明日発売のＣＤを既にフラゲしていて貸してくれるとか――」
「２人とも今日放課後用事ある？　無いならうち来ない？　母さんがこの前のお礼がしたいって」

海斗のボケみたいなものをあえてスルーして普通に話を進めてみる。勢い余って横でこけてるし、哀れな海斗…
そんな海斗を手助けしながら、彩は困惑するように言う

「この前…？　あぁ！　手伝ったときの。でも私たちお蕎麦ちゃんと貰ったよ」
「あれはまあ、俺からのお礼的な面があったから。で、今回は母さんからのってこと」
「はいはいそういうことね。じゃ、行くわ。彩も大丈夫だろ？　なんだかんだ創の家の蕎麦うまいからな」
「もうっ…ご厚意で頂けるんだからがっつかないでよ。まあでも、それは私も同じかな。大丈夫、行くね」
「はーい、お待ちしてます」
　放課後になると、俺は一足早くお店に戻ってこの要件を伝えた。両親とも了解とのことだ。まあ、さっき見た限りお客さんもいなかったし、タイミング的にも丁度良かったのかも
　少し洗い物を手伝っている時、扉が開く音が向こう側から聞こえてきた。声からして間違いない、海斗と彩が来たんだろう。

「やっと来たな、いらっしゃいませ」
「おう。えっと、どこ座ればいい？」
「どこでもいいよ。今は誰もいないし」
「じゃあここでいいんじゃない？　海斗ほら、座って座って～」
「はいはい、急かせるなよ全く」

　予め用意しておいたお冷やを二人の前に出すと、海斗は一気飲みで飲み干してしまった。まあ、もう外も暑いから丁度良かったんだろう。こういうとき、うちが机の上にウォーターピッチャーのある店で良かったと心から思う。いちいち呼ばれて水注いで戻ってくるのなんて――正直面倒くさいし

「さーて、何食べるかな。創、おすすめは？」
「お前うちが何屋だと思ってんの？蕎麦だろ」
「じゃあ私はかけうどんで！」
「……は？」

「いや、かけうどん。あるよね？書いてあるんだし」
「いやあるけど蕎麦のが――」
「だってうどんのがおいしいよ」
「いや、絶対蕎麦だって！」
「うどん！」
「蕎麦！」

そうだ、こうして戦争は起こってしまったんだ。席的に、俺と彩の間にいる海斗は途中まではメニューを見ながら聞いていたようだが、いい加減イラついてきたんだろう、バンッと大きな音を立てながらメニューを閉じて俺たちを交互に見た

「お前らさ、その水掛け論いつになったら終わる訳？　まずお互いの長所を理解するとか、そういうことから始めればいいじゃん」
「長所？」
「ふ～ん、創くんは蕎麦の長所も説明できないの？私はできるよ。うどんの長所」
「ふっ、ふん！　じゃあ先攻は譲ってやろう。別に考えが出ない訳じゃ無いけどな」

敵の出方を見るのも戦術の内。うどん派の考えを聞いておこう

「まず、うどんっていうのは消化に良いの。風邪の時なんかにも良いって言うわね」
「へぇ～」
「ま、まあ？　海斗が風邪引いたら…その…作ってあげても…いいよ？」
「マジで？　じゃあ覚えておこ。ありがと」
「おーい、息をするようにイチャつくなー」
「い、イチャついてなんかないもん！」

いや、否定するだけ無駄でしょうよ、それ。もうここまで来たら海斗からも何かすればいいと思うんだが…それは余計なお世話なのかな

「と、とにかく！他にも長所はあるの！日本中で愛されてるんだから！」
「というと？」
「まず、讃岐うどんでしょ、伊勢うどん稲庭うどん。エトセトラエトセトラ…」
「なるほど。でも広く伝わってるって面は蕎麦も同じだ」

こっちのターンになったら言えばいいだろうけど、蕎麦だって沢山種類がある。日本中に広まってるからこそ、戦争も終わらない…

「後はね、えっと、女子力が上がるとか上がらないとか」
「そんな不確かな?!」
「だって誰かが言ってたよ？　海斗知ってる？」
「俺も何かで見たような…見てないような…でもそもそも女子力って何基準？」
「いやそれはその…女子力は女子の力なのよ！」
「いや説明になってないし…それ」
「まあなんだ、それは置いておいて彩の説明も終わったみたいだし俺のターンにしてもいいか？」
「ふふっ、良いわよ。聞いてあげる」

手を前で組んで迎え撃つ気満々って感じですか。でもあの態度、俺の切り札を食らったらどうなるのか…楽しみだ

「まずさっきの話からしようか。種類のやつ。蕎麦も沢山種類があるんだよ。更科蕎麦、十割蕎麦とかね」
「ふぅん、ならそこは互角って事でいいわ」

「でも他に特出して言える事はあんまり無いんだよね。消化もあんまり良くないし、その謎のパラメータも上がらないし」
「それは蕎麦の負けを認めると言う訳で――」
「でもそれは違うぞっ！」

何か白黒の熊が出てそうなゲームのようなセリフが出た。カットインとか入ればいいのに。あと銃声
それはともかく、突然俺が大きな声を上げたから彩が驚いている。隙を見せたな？ここで切り込む！

「俺には関係無いが、彩には大切かもしれない。……蕎麦はダイエットに活用する事ができる」
「なっ…？！」
「確かカロリー量で言うとうどんのが低いんだ。でも栄養素とか、その他諸々の点を見ると蕎麦の方がダイエットになる」
「創…女子にダイエットという単語をぶつけるとは…中々に鬼畜な事すんのな」
「勝つためには手段選んでられないんだ…」
「そんな気迫迫る感じで言われるとこっちも困るんだけど…」

後一押しって所かな。そもそも、ここが蕎麦屋で俺が蕎麦派な時点でこっちの勝ちは決まってたような感じなんだけど。出来レースなんだよこれ

「簡単にダイエット。多分女子の夢だろう。なら女子力もついでにつく！　…かも」
「いやぁ！もう辞めて！」
「ふっ…勝った…」
「…お前らバカなの？」
「勝ったのに辛辣？！」

耳を塞いだ彩と、ヒートアップしてる俺。端から見たら海斗のツッコミは正しいんだろうけど…気にしたら負けか
彩は俯いたまま、再度メニューを開いた

「そういうことなら…私、蕎麦でいいわ。ざる蕎麦1つお願い」
「あ、じゃあ俺がかけうどんで」
「海斗！話聞いてたでしょう？私たちは負けたの。蕎麦の方が優れてるわ」
「…いや、俺それ関係ないし。食べたいもの食べないとそれこそ健康に悪そうだと思うんだけど」
「そっか…！　そういう考えもありなんだ」
「心変わりして蕎麦が良いならいいんだけどね。それに食べたいなら少し分けてあげるよ」

それを聞いた瞬間、彩の顔が音を立てるように赤くなった。これ、多分考えて言ってるんじゃなくて自然と言ってるんだからすごいよなぁ、この天然ジゴロめ…主人公属性かよ。相手がいるってだけでも俺からしてみれば羨ましいのになぁ

「ありがと……」
「ん。それじゃ、注文それで」
「はいはい、了解ですお客様」

厨房に伝えると、半ば呆れられながら作ってくれた。ついでに俺の蕎麦まで。一緒に食べてこいとこのことらしい。こっちとしてはさっきの海斗の発言と彩の反応を見てただけで色々とお腹いっぱいです
トレーに注文のやつと、取り分けるらしいからそのためのお皿も乗せて…っと

「はい、こちらかけうどんとざる蕎麦になります。あと俺も食べるか

ら」
「おう！　みんなで食べた方が美味いでしょ」
「そうだね。それじゃ、いただきます！　う～ん、美味しい！」
「いただきます。っと、取り皿取り皿。はい、口着ける前によそっといたから」
「う、うん。ありがと…」
「実は口着けてからのが良かったり？」
「うるさい！　私はそんなに変態じゃない！」
「いったぁ?!お前、殴るなって！」

そうして騒がしくも楽しい（？）食事の時間は終わった。蕎麦うどん戦争は…今日のところは引き分けにしておいてあげようかな、色々と考えさせられる事もあったし。でもまずは――

「母さんー、うどん一杯頂戴」

うどん食べてから。かな

カラオケと友

今は5月、初夏と言ってもまだ春の夕方というのは少し肌寒い
だからと言って、部屋のなかは寒くはない。というより人がたくさんいるので暖かい
その部屋ではアニメ好きの男子高校生が某ロリアニメのオープニングソングをきっと素晴らしい歌声が響いている。
詩が終わった瞬間、「小学生は最高だぜ!」とマイクに向かって叫んだ。
周りはどよめき一人は、いったい何のことかわからないようでぽかんとしていて、一人は某ネコ型ロボットがしたことがあるような温かい目で彼を見守っている。
また、彼を想う後輩の女子高生ですら、彼を見る眼はもう光を消して、蔑んだ眼をしている。
曲が終わった数秒後ついさっきの曲を歌っていた彼は、温かい目をしていたもう一人の男子高校生と俺に怒号を飛ばした
「図ったな!図ったな!!詠斗!!!」
ここまでくる経緯を簡単にはなすと、俺こと天下谷健誠は同じクラスで中のいい上杉真也を誘い、詠斗、海斗、彩と真也が連れてきた虹村朱音先輩、谷坂透閃先輩、橡白月先輩とともにカラオケに来ている。
それで来て、一番最初に歌ったのが、あれだったというわけだ。
もともと、あの曲は俺が入れたもので、先輩達と詠斗達は初対面のはずだから、(俺は一応朱音先輩は知っている)気まずかったので明るくするために、詠斗と海斗に歌わせて、明るくするつもりだったのだが、
「こいつら、俺は初対面の先輩の前でこんな恥晒しの歌を歌わせるんだよ」
逆に海斗の気分を害させてしまった。こんなはずじゃなかったのにな。
最初に海斗の好きなアニメのオープニング曲のチョイスが悪かっ

たか？
「そもそも、詠斗！一緒に歌うって言ってなかったか」
「いや～そっちのほうがおもしろそうだからｗｗ」
海斗がそんなことを言うと詠斗はすぐに返した
「詠斗～!!」
と言って海斗は詠斗の首を腕に引き寄せヘッドロックをする
そんなこんなで採点が出る。
『９８．６点　ランキング１位／１５０００人中』
うわぁ～ｗｗｗ高ぇｗｗｗｗｗ
「なんでこんないい点出るんだよｗｗｗｗｗ」
あ、つい心の声が漏れた
「凄いな、好きなものに対するその信念が」
と透閃先輩は感心するそれでも、それ遠回しで釘を指してますよー。
そして、彩に関しては「引くわね」
ばっさり、こいつさっきの大熱唱してたロリコンに惹かれていた女がいうか普通
「ぐっ……彩もっと優しい言い方があるだろ……」
「ごめん俺も見ててそう思ったかもしれない」
「そもそも、お前の責任じゃ～!!!」
そう言って俺の首を絞めて、体を揺らす
あ～脳が～揺れる～
詠斗「同署を求めても無駄無駄無駄ぁ！」
詠斗それ、今、某リズムゲームの挿入歌を歌おうとしてるやつが言うな
お前がカラオケマシーンにその曲を入れようとしてるの分かってんだぞ
あと、
「スタンド使いみたいに言うな
オラオラオラァって言いたくなるだろう!!
スタンド使いに謝れ!!」

「それ、お前弁解の糸になってねぇ」
「健誠くん」
「はい？」
「２年生ってみんなこうなの？」
「いやぁ、彼らだけですよ」
「面白いのね」
「はい、あ、先輩方も１曲どうぞ！いや、１曲じゃなくてもどんどんどうぞ!!」
「いいの？」
「ええ」
「そうだな～」
「ねぇ、彩ちゃん、一緒にこれ歌おう!!　」
「良いですね!!唄いましょう白月先輩！」
彩と白月先輩はもう既に仲良くなってた
海斗が歌ってる間に仲良くなったのかよ
凄いな女子のコミュ力
「その次、透閃先輩！俺と歌いませんか？」
「うーん!?ロリコンの歌以外かならいいぞ」
「２度と歌わないですよ」
「あ、僕も混ぜてください先輩方」
「いいねーじゃあ歌うか！」
「この曲なんて面白いですよ！」
そんなことを思っていると
詠斗が某リズムゲームの挿入歌であるなんたら女子道を熱唱する中、海斗も先輩と真也と打ち解けてきているようだ
あれつけなくても良かったのかな？
そう言って僕は『こんな村いやだぁ』を選択するのであった

俺上杉真也はふと疑問に思った
なぜケンチーは留年したのに同級生と仲がいいのかと

ふと疑問に思うのはちょっとした陰口だった
「健誠って人、本当は2年生を妬んでるだろう」
確かにケンチーは留年して、僕らの学年に留まった
普通の学年なら退学したり、転校してしまう事が多い
僕だったら、どうだろうと思うと2年生になった同級生が羨ましいと思うんだけど、
裏を返せば妬みにもなるだろう
それなのにあの人は平然と何にもなかったように彼らと遊んでいる
だからどうしても聞きたかった
「あの、ケンチー」
「ん?何だ?」
ケンチーは近くにあったお茶を呑みながら首を僕の方へと向ける
「一つだけ聞きたいことがあるんだ」
「なんだよ?、もしかして留年していることかい?」
バレてた
凄いな!!超能力者かよ!!
まぁいいや、丁度いいし
「まぁ、そうだよ」
「お前には言ってなかったね、俺はただ病院にいたら留年したそれだけだよ」
「は?どういう事?」
カンタンに訳し過ぎて何だか分からないんだけど……
「そのままだよ、病院で入院して留年したそれだけだよ、だから詠斗たちはそれでも妬みや羨ましいがったりするわけが無いさ
」
その声は実に優しかった
「本当にかよ」
「運命って言うのは人とは違うんだよただ僕の運命は留年する運命だっただけだもし、共に出来るなら高校の時だけは出来るだけ一緒にいたいと思ったんだ

次、俺の曲だからじゃあ、」
と言って無邪気に笑ってマイクとって歌った

「はぁ～こんな村やだァー!!!」
おい、最後!!カッコイイ言葉言ったのにこの人一瞬でシリアスブレイクしたぞｗｗｗ

カードゲーム（物理）

「知略と武力を兼ね備えて、初めて本当の強さを得るんだ!!」
今は新緑の風が女子高生のスカートをヒラヒラ揺らす、五月の休日。
いつものように、俺、詠斗、実音、創の４人（彩は家族と出かけるらしく、今日はいない）で、我が高道家に集まっていた。
しかし、集まっただけで特にすることもなく、各自スマホを弄ったり、単語帳を読んでいたり、ゲームをしたり、ワクワク顔で勝手に人のパソコンを使ってエロゲをしたりと、自由に行動していたところ、突然スマホを弄っていた詠斗が立ち上がり、宣言した。
「はぁ……詠斗、特に興味がある訳でもないが特別に聞いてやる。いきなりどうした？」
「いや、たまたまＴ○ｉｔｔｅｒを眺めてたらな、なんか面白そうなカードゲームが今日発売らしいんだ」
「それがどうした？」
「やろう。」
『却下』
なんで俺達がいまさらカードゲームなぞに興じなきゃならんのだ。しかも詠斗が目をつけるものだ、確実にクソゲーと言ってもいいだろう。
しかし詠斗はまったく引こうとしない。
「えぇ～、いいじゃん。やろうぜ～！　今ならスターターパック１０００円で買えるらしいぞ！」
「そうは言ってもなぁ……創、お前はどう思う？」
１歩も引こうとしない詠斗は対処がめんどくさいので、創に問いかける。
「んー？　俺は別にいいぞ。どうせこのままダラダラするくらいならなんかやった方が有意義だろ？」
「マジかよ……実音は、聞くまでもなく賛成だろうな」

「まぁね、半数がやりたいって言うんだから僕もそっち側につくよ」
先程までエロゲをやっていたノートパソコンをそっと開き、実音も同意する。こうなったら仕方ねぇか……。
「じゃあ、早速ＴＳ○ＴＡＹＡでも行くか」
そう呟き、俺たち４人は喧騒に包まれた休日の住宅街を歩き出した。

～～～

というわけで、あれから1時間後。
「よし、じゃあ……まずは、俺と実音でやるか!!」
ＴＳＵＴ○ＹＡから帰ってきた俺たちは、早速買ってきたカードゲーム――デーモン・バスターズのスターターパックを開封し、デュエルをスタートしようとしていた。
まずは、発案者である詠斗と、詠斗によって選ばれた実音が勝負をするようだ。
「いいけど、僕はカードゲームなんか遊○王しかやったことないよ?」
「まぁ、安心しろ。これの遊び方は見た感じ、デュエル・マス○ーズと同じ感じだ」
「いや、それ大丈夫じゃないんじゃ……」
「……やってりゃ、そのうち慣れるだろ。それでも不安なら、実音のサポートには海人が付いてやってくれ」
「あ、あぁ。じゃあ実音、よろしくな」
急に話を振られたおれは、戸惑いつつも実音の隣に胡座をかく。

～ルール説明～
・カードにはクリーチャーと、スペルが存在する。クリーチャーには体力と攻撃力があり、スペルには、色々な特殊能力を付加したり、攻撃するものがある
・それぞれのリーダーにはシールドと呼ばれるカードが５枚あり、

攻撃から守ってくれる。シールドはダメージを喰らうとなくなる。
（その攻撃は無効化される）
・シールドか無い状態で攻撃を受けると負け
その他ルールはその都度説明。
と、まぁ、こんな感じだ。要するにデ○エマとシ○ドバを足して2で割った感じ。
隣に座っている実音は、初めてのゲームに戸惑いつつも、少し楽しそうにデッキをシャッフルしている。
すると、机を挟んで反対側に座る詠斗が口を開く。
「よし、じゃあ準備も終わったし、早速――」
『決闘開始《デュエル・スタート》!!』
こうして、詠斗ＶＳ実音の闘いの火蓋が切られた。

「じゃあ、まず先攻後攻を決めるか。先攻は、最初のターンのドロー無し。後攻はドロー1だ。よし、じゃーんけーん……ぽんっ」
出した手は、実音がグーで詠斗がパー。
「よし、じゃあ僕が先攻だね。えっと……海人、どのカードを出せばいいかな？」
「ふむ……そうだな、1ターン目はコストが1のカードしか使えないからこいつだな」
そういって、実音に『ブラッドゴブリン』と書いてあるカードを出させる。攻撃力、体力は1／2だ。このカードを出して、実音のターンは終了。
「俺のターン！　山札からカードをドロー！」
やけにテンションの高い詠斗がものすごくウザったいポーズを取りながら、カードをドローする。率直に言って殴り飛ばしたい。
「呪文《スペル》発動!!」
「名前は『オールフィクション』……？　えーっと効果は……『相手の全クリーチャーとシールドを消滅』!?!?」
1ターン目からいきなりぶっ壊れ性能キターーーーっ!!
「コスト1の割に最強カードじゃねぇか!!」

「そんな文句言われてもなぁ……このゲーム作ったの俺じゃないし」
「その通りだよ、こんちくしょう！」
そう吐き捨てて、とりあえずルール通りにシールドを全て墓地へと置いていく。なにこれ、1ターン目でシールド全部消えたんだけど。王様が裸になるの早すぎません？
とにかく、1コストであんな化け物カードが出るとなるとこの先なにが起こるか予測もつかねぇな。なんだこのクソゲー。
心の中で悪態をつきつつも、俺は実音に指示を出し続ける。

時間は少し進み、3ターン目の詠斗のターン。
「俺のターンッ！　ドローっ!!」
相変わらずのハイテンションで、心からゲームを楽しんでいるようだ。控えめに言ってウザい。
「はっ……これは……!?」
「ん？　詠斗、どうかしたか？」
「いや、なんでもねぇよ？　ふは、フハハハハハ」
なんか……怖い。いや、これが詠斗のいつも通りなんだが、それでもどこか狂気めいた気配を感じる。
「ふっ……とくと見るがいい！　俺の美しきカード捌きを!!」
そう言って、詠斗は1枚のカードを人差し指と中指の間に挟み、それをクルリとこちらに向けて叫ぶ。
「泣いて喚いて懇願しろ……スペル！　死の恐怖《デッドリースケア》!!」
うん、やっぱりウザい。端的に言って気持ち悪い。このカードはなんだろうか。死の恐怖か……なんか少し嫌な予感がするんだが……。
「説明しよう！　このスペルは相手のリーダーにダメージを与えるのだっ！……物理的に」
「最後の一文が怖い!!」
「まぁまぁ、大人しくやられろって。……いや、殺られろって！」
「わざわざ言い直さなくてもいいわ！」
「よし、じゃあ何にする？　バット？　ハンマー？　それとも

……バ・ー・ル・の・よ・う・な・も・の？」
「語呂悪いわ!!!　　そこは3文字のものにしろよ！」
「おーけー。それじゃあナイフだな」
「鋭利!!!」
「ん？　　生理？」
「それも確かに苦しいらしいけども！」
　だめだ、このままじゃ埒があかん。もうほっとこう。どうせ物理的ダメージ喰らうのは俺じゃなくて、プレイヤーの実音だし。
「なぁ海人。さっきから何を言ってるんだ？　　僕にもわかるように説明してほしいんだが……」
「おぉ、そっか、それもそうだな。まぁ簡単に説明すると――今からお前は死ぬんだよ」
「なんてデスゲーム!?」
「これは決闘だ。もちろん負けたものに待ってるのは死だろ」
「いやいやいやいや!!　え、デュエリスト怖っ！　　毎回命賭けてんの!?」
「まぁまぁ、いいから逝けって。な？」
「いや、「な？」じゃなくって。待って詠斗、その手に持ってるの何!?」
「バールのようなもの」
「バールのようなもの!?　　ちょっと待て、詠斗！　　無言で近づくのやめて！　怖い怖い怖いぎゃぁぁぁぁぁーっ！」
　はぁ～、俺、しーらね。
「……あれ、そういえば創のやつ、めっちゃ空気じゃね??」
　そんな俺のどうでもいい感想とともに、実音の悲鳴が俺の家にこだました。
　結論：とりあえず知略よりも、武力に重きを置くべし。

テスト勉強

5月中旬
今週はテスト週間
これが意味することは中間テストが目の前だということ。
もちろん受験生たる俺らは勉強をしなくてはいけない
（当然他の学年も等しくテストが待っているので勉強しなければならないのは同じだが）
そうはいってもテスト週間だ。
今年は受験を控えるがゆえに勉強はもはや外せない。
でも部活がない！
下手をすればこれ以降はそんな休めと言われているようなことはないかもしれない。いや、ない（反語）
ともかく、これだけ時間があるのだから1日くらい遊びに行きたい。
それがだめでも1日徹夜でゲームをし続けたい！
……絶対に親は許さないよなぁ。
テストの成績下がったらどうするんだって言うんだろうな。
「……せ……ん……」
っていうかなんで俺の部屋にはテレビが無いんだよ。
折角この前小遣いをはたいて買った「ぎゅうどんファンタジー」をまだクリアしてないのに。こんなに時間があるんだし少しくらいいいじゃんよ！
「…うせ……ん…」
まじでうちの親は俺を縛りすぎだと思うんだよな！だいたい高校生なのに小遣い月３０００円とか絶対に足りないだろ。
バイトもしたいのに親が許さないから出来ないし、もう納得いかな……
「反応しろ!!透閃！」
「ぐはっ!!」

えっ、なになに！チョップ!?チョップなの!?
なにが起きたかわからないけどとりあえずみんなが一斉にこっちを向いたのはわかった。
「あっ、な、なんでもないよ。なんでもないから！アハハ～……」
目の前でごまかしているのは白月だった。
「ったく、なんだよ白月。いきなりチョップかますほどのことでもあったか？」
「あったんだよ。気付いてないの？自分が今何してたか。」
俺が……何かしてた？
今はテストとうちの親に対しての不満を考えてたし机の上には数学の授業でもらった宿題のプリントがあるくらいだし。
心なしかそのプリントが自分の記憶よりだいぶ進んでいる気はするが。
「……何してたんだ？」
「気付いてなかったか……
君ね、数学のプリントを訳のわからないことを延々と呟いきながら解いてたんだからね？
数学だし、式を復唱してるのかと思えばそれとは全く関係ないことを呟いて、でも腕は数字を書き続けて。
……少し、気味が悪かったんだから。」
「え、まじか。そりゃ悪かった。」
「ふふーんだ。わかればよろしい」
なんだか白月が少し勝ち誇ったような顔をしていて思わず、お前は小動物かとツッコミたくなるのを必死で押さえていたことは秘密である。
「それで、どうした？なにか用事でもあったか？」
「今は昼だよ、透閃くん。お弁当一緒に食べようって思ってきたのに君はそんなことにすら気付けないのかい？」
「いや、お前はいつも他の女子と一緒に食べてるじゃないか。いきなり俺のところ来てもわかんないよ。」
「あ、それもそうだったね。失敬、失敬（笑）」

だめだこの子やっぱりアホの子だった。
「ってそうじゃないの、それ以外に言うこともあるの！
あの……勉強、教えて下さい……ば、場所とかはどこでもいいから。なんならそっちの家まで行くよ！」
……ああ、そういうことか
何はともあれ突然の誘いだ。どうするかと聞かれれば了承する。そうに決まってる。
「いいよ、勉強くらいならいくらでも付き合ってやるよ。
でも悪いな。うちで、っていうのはたぶん親が許しを出してくれないんだよなぁ」
「そ、そっかー、じゃあしょうがないね」
「そうだな……放課後でいいなら図書室でやるか」
「……！うんっ！じゃあよろしくね♪」

～～～

はっ！私の身が持たない!!

ええええ、えっとととと

と、とっ、とりあえず――――――

～～～～～～～～～

瞬先生に捕まっていつもの「課題だせ」の説教をくらってから俺は図書室に向かった。

「あー……朱音がいるのは全然違和感ないんだけど、なんで真也までいるんだ？」

「お久しぶりですね！透閃先輩！

僕は絶賛あかねえに連れられテスト勉強中ですよ」

「いやいや、お前の実力ならまだテスト勉強必要ないレベルのところだろ？」

「いやー……それがで…「春休みサボった結果高校入学直後の学力検査のテストでそうとうな点数を取ってきたのよ」

ってあかねえ、それストレートに言わないでよ!!」

なるほど、真也がそれで朱音に泣きついて助けてもらったってわけか。朱音のことだからサボろうとしてた真也を見て『前回の反省してないの？』なんていう風に言って勉強させてるんだろう。

朱音は教え方はうまい方だろうし、問題のチョイスがうまい。

え？なんで知ってるかって？

……身をもって体験しましたのよ

「まあ、がんばれ…」

「ちょっ！なんですかその含みのある励ましは！」

「ふ、ふたりとも静かにしよう？図書室だから、ね？」

白月の制止で気付かず大きな声を出していたことに気付く。

「……勉強するか」

「そうですね」

～～～～～～～～～

「ここは、定数項の約数をｘに代入してみて式が０になるやつを探していく。で、見つけた解が出てくる式とそれで元の式を割ったのにわけるんだよ」
「二次関数はグラフさえかければおおむね解けるわ。まずは平方完成。徹底しなさい」
　着々と勉強を進めて行くなかでふと教えてもらう側の二人は思っていた。
（わかってはいたけど……二人って抜かりなくやってくれるけどなかなか厳しいよね）
　とはいえ、かれこれ１時間くらいやってたため二人としては少し休憩したいところ。
「私、ちょっとトイレ行ってくるわ。透閃、真也がサボらないよう見ててちょうだい」
「あ、トイレなら私も行く」
　ようやく休憩……
　あかねえも透閃先輩も真面目すぎだろぉ……
「ちゃっちゃとそこだけやっちゃえ。終わったら少し長く休憩してもいいって朱音も言うだろうから」
「わかってますよ。」
　言われなくたってやる。キリが悪いのは元々嫌いだし変に途中で休みをいれると頭になかなか入らないし。
「……透閃先輩はあの先輩のことが好きなんですか？」
「白月のことか。別に嫌いじゃないけど好き……とは違うかな。」
「じゃあ、あかねえを狙ってるんですか？」
「ぼっ！……そういうのじゃ……ねえよ」
　あ、これは明らかに。
「あかねえには黙っときますよ」
「なっ!?べ、別に朱音のこと好きなんて……」
　素直だなぁ…ま、こういうことで揺さぶったり口を出すのはやぼってもんさ。
　あかねえに男子の友達なんて珍しいし、もしかしたら透閃先輩のこ

とあかねえも好きなのかもしれないし。
まあ、先輩頑張って下さいな。
「ところで話は変わりますけど、ここどうやればいいんですか」
「この流れで聞くのかよ……えっと、これは――――」

～～～～～～～～～～～～
「つっきーはどこがわからなかったの？」
「へっ？」
今はトイレに行く途中。なぜか図書室のあるこの棟にはトイレがないからちょっと遠いけど教室棟までいかないといけないっていうちょっと不便な面があったりする。
階段を下りながら朱音ちゃんが話しかけてきた。
「わからないから透閃に聞いたのでしょう？というか、いつもなら透閃よりも先に私のところに来るじゃない」
「あはは、実はわからないところはなかったんだけど、その……このままだと勉強しないで時間過ごしちゃいそうだなと思って。ほ、ほら、透閃くんってそういうところ真面目だし。いっしょに勉強すれば私もやる気になれるかなって」
嘘をついた。
本当は誘うつもりなかったけど間違えて誘っちゃっただけって。それだけなんだから朱音ちゃんに言ったって別に何もないはずなのに。
でも、なんか言わない方がいいと思った。
今の一言だけでなぜかとても後ろめたく感じる。

きっと、朱音ちゃんに咄嗟に嘘をついたせい。
……きっと、そう。

「ふふっ、そうね」
朱音ちゃんはそれしか言わなかった。
その時の朱音ちゃんの顔が、無邪気に笑う無垢な子供のような微笑

みで、また後ろめたく感じた。
～～～～～～～～～～～～
朱音たちが戻ってきてしばらくやって
「もう6時か。そろそろ終わろうか。切りのいいところで帰ろう」
「そうね、このままだと暗くなっちゃうわね」
「終わりだー！」
「終わりだよー！」
白月と真也はようやく終わった見たいな顔をしている。
……そんなに厳しかった？
そんな厳しく教えたつもりはないんだけどな～
「白月、そこの展開間違ってるぞ。」
「あっ、最後の最後で間違えちゃった」
「先輩、終わりって言葉を聞いて気が抜けましたね」
「ふふ、貴方らしいわね」
こうやって、笑ってみんなでいられる。
やっぱり、みんなでいるのは楽しい。
改めて、俺は2人と友達になれてよかったって思った。
……あっ、真也はイレギュラーだから。

告げられた想い

あの勉強会から数日後のことだった。創と彩のうどん蕎麦戦争もあったが、平和に集結しあとは勉強合宿を待つのみとなった俺達は、日々の授業に励んでいた。

だが、俺の調子はすこぶる不調であった。

「高道」

外をボケっと眺めて気の抜けた顔をしている俺は永斗達からも心配されてしまう始末だ。

「高道ー」

そう、あの勉強会を思い出す度に彩の姿がチラつくようになったのだ。

「高道くーん？」

お陰で小テストもすこぶる悪い結果だった。完全に俺に非があるはずなのだが、原因が分からないためこうして考え事にふけっているわけである。

「たーかーみーちーくーん？」

まるで訳が分からんぞ。何故こんなことになってしまったのか。これぱかりは詠斗も創も実音も教えてくれない。果たして、誰に相談すればいいのやら……。

「ねぇ、高道くん……！　当てられてるよ……？」

「ん……？」

隣の女子から声をかけられたことで俺ははっと意識を取り戻す。顔を上げると、そこには困り顔の北条　夏子先生がいた。

「高道くん？　なんか最近変よ？」

「い、いえ……大丈夫です」

嘘だ。全然大丈夫なんかじゃない。その証拠に、最近みかんが全くうまく感じられない。静岡県産の新鮮なみかんなはずなのに……。

とにかくだ。このままではいけない！　何とかしなければ……。俺はそう思い、気合を入れ直してその後の授業に望むこととした。

だが、そんな気持ちとは裏腹に、どうしても彩のことを考えてしまい授業に全く集中出来なかった。
とまぁ、そんな授業も終えてもう放課後だ。
いつもなら詠斗達と帰るとこなのだが、悲しいかな、全員用事があるそうなので帰れないらしい。彩達1年生も放課後に学年集会があるので一緒に帰るには時間がズレてしまう。さて、どうしようかと思った時、ふと肩に手を置かれたのを感じた。はて、誰だろうかと後ろを振り返ると、うちのクラスの男子の数少ない良心がそこにいた。
「海斗、お前今暇？」
「暇だけど？　春希？」
春希の説明は前にしてるからいいよね。どうせほかの人がやってくれてるだろうし。あれ、こんなこと四月にもあったような……。ま、いっか。
「ま、ちょっと話しようか」
どこか危ない誘いのような雰囲気があるけれど、まぁ春希なら大丈夫だろう。詠斗とか実音はともかくとしてもね。
まぁ、そんなこんなで俺と春希は1年生を待つべく、1年生の教室の前へと移動することとする。どうせ1回教室へと戻ってくるだろうしここで待っておけばすれ違うこともないだろう。
「なぁ、海斗」
「んー？」
っと、突然春希から声をかけられた。その顔はどことなく優しい感じをまとっていた。そこがモテる理由なんだろうなぁ。
「お前、彩と何かあったろ？」
そして、この鋭さである。え、今回のは誰でもわかる？　……そんなことないはず……。
「まぁ、そうだよ。あいつの姿が事ある度にチラついて集中出来るものもできやしねぇ。全く……いい加減にして欲しいものだよ」
しかもそれが笑顔でこちらを見ているようなものだから余計にタチが悪い。何故か愛おしく感じてしまうこの感覚は早く捨ててしまいたい。あいつにはこんな感情は向けていけない。そう思っている

はずなのに……。
「でも、本心ではそれが嬉しいんだろ？　お前、授業中に悟りでも開いたかのような顔してるからな。詠斗達は気味悪がっていたぞ」
「えぇ……」
詠斗達に気味悪がられるとかそれホントにやばいじゃん。特に実音にそう思われてるのは実際ヤバい。
「でも、彩はお前には懐いてるからいいんじゃないか？」
「懐いていたらあんなにどつかれないよ」
「ここがダメなんだよなぁ」
一体どこがダメなんだろ、そう思った時だった。ふと、体育館に通じる廊下からトタトタという音が聞こえた。音からして1年生の女子だろうか、そして、今このタイミングで現れると言ったら……
「春希……！」
そう言って、彼女は春希に抱きついていった。
「あいも変わらずお似合いカップルで」
「――いたんですか、邪魔なんで帰っていいですよ海斗先輩」
「それは酷いんじゃないかな、凪咲」
「春希さえいればそれでいいんで」
もう分かってると思うけど、凪咲の説明も省く。こんな子でも彩と健誠とは仲がいいんだから不思議なもんだ。
「そう言えば、凪咲。もう集会は終わったのか？」
「終わった、私は春希と早く会いたいから走ってきた」
「そうかそうか」
そう言って、春希は凪咲の頭をなでなでする。こういうのは見てて微笑ましいなぁ。創とか詠斗とか実音が見たらキレそうではある。
「凪咲、彩は？」
俺もここぞとばかりに聞いておくこととする。
「彩は健誠と一緒。そろそろ戻ってくる」
それは安心だ。俺は凪咲にありがとうと声をかけると、壁に寄りかかり彩が戻ってくるのを待つこととする。
その間は春希達の会話を聞いておくこととする。

「春希は何を話してたの？」
「ん？　彩と海斗のことについて」
「知ってた。春希と私は一心同体だから」
　そうか、俺がお前でお前が俺でってやつか。あれ、この２人ゲーム得意だったっけ？
「多分、彩なら大丈夫」
「ん？　なんで？」
　なんか凪咲が気になることを言っていた。俺は気づけばそれに反応していた。
　それがかなり重要な事だとは気づかずに。
「だって彩、海斗先輩のこと好きですよ？　私と春希みたいな関係になりたいと思ってるはずです」
「……は？」
　なんかすげぇこと告げられたなぁと俺は思考を停止しざるを得なかった。
☆☆☆

「やっと終わったなぁ」
「そうねー、うーん……！」
　私達１年生は気だるげな学年集会を切り抜け、各々が放課後何するだとか部活だとか言ってる中、私は健誠くんの隣でぐびーと背伸びをしていた。以前これを詠斗の前でやった時には、胸がないから色気がないなとか言われた。当然腕十字固めを決めておいた。
　凪咲は終わったと同時にどこかへ消えてしまった。多分、春希先輩の所だろう。
「そう言えば、海斗が最近不調らしいな」
　健誠くんが話題を振ってくる。そう、最近海斗が不調なのだ。事ある度に意識がそっぽを向いてしまいあまり集中出来ていないようだった。
「そうなのよ、何か原因が分かればいいんだけど」
「……はあ……よ」

「え？　何か言った？」
「うん？　何でもないぞ？」
健誠くんが何か言っていたが何も無いならいいや。しかも、不調なだけではなく何処と無く私と距離を置いているように感じる。詠斗の家でも出来事がなにか釈に触ったか。いや、でも海斗はそれぐらいじゃ怒らないし……。うーん、わかんないや。
「ともかく、疲れた」
もう、先生の話がだるいのなんの。私って基本的にいい子で見られちゃうからこういう所でも先生の目は向いちゃってるんだよねぇ……。ほんっとうめんどくさいこと。
「そうだなー。帰るときに何か奢ろっか？」
「あれ？　部活は？」
「休み。テストとかそういうの近いし」
「そう？　ならコンビニでケーキでも奢ってもらおうかしらね」
「お手柔らかに」
その時は海斗も誘って……どうせなら凪咲と春希先輩も呼んでもいいかもしれないわね。
そんなことを考えながら私たちの教室へも近づいていた。そして、廊下を曲がるとそこには海斗と春希先輩と凪咲がいた。声をかけようとした時、凪咲がある発言をもたらした。
それは海斗と私の関係を大きく左右することとなる。
「だって彩、海斗先輩のこと好きですよ？　私と春希みたいな関係になりたいと思ってるはずです」
――――え？
もう隠せはできない。そう悟った瞬間だった。
☆☆☆
「海斗……！」
「彩……」
最悪なタイミングで彩が登場した。何もそこまでピッタリに登場しなくてもいいだろうに。
「あー……、修羅場？」

健誠が的を得たかのような発言をしたがそれは違う。修羅場だったらどんなに楽だったか。
「凪咲……」
「あれ？　春希、私何かした？」
あぁしたさとは言えない。この子はどこか素直な所もあるからとても言えるわけない。
「えっとそのぉ……海斗？」
「う、うん？」
彩が緊張した様子でこちらに問いかけてきた。あれ、何これ彩ってこんなに可愛かったっけ……。
「私の事好き……？」
「好き……かな、多分」
この気持ちは本物なのか。これは恋心なのか。分からない。
「多分って……じゃあ付き合ってくれる……？」
恥じらいを持ちながらもこちらに問いかけてくる彩。付き合う、いくら俺でもこれくらいはわかる。男女の付き合い。今から受験やなんやと忙しい時期にこの告白。彩だってその事は分かっているはずだ。でも、こいつは告白してきた。きっと凪咲の一言がこいつの気持ちを後押ししたのだろう。
「付き合う……うん、付き合おう。俺はお前が好きだ彩」
ならば俺もこれに答えなくてはならない。今は好きになれなくてもこれから好きになればいい。ゆっくりでもいいんだ。
「そう……ありがとっ！　大好きよ、海斗！」
太陽すら霞むような笑顔でそんなことを言ってくる彩。こうして、俺と彩の関係は1歩前進したのだった。
その後の帰り道は二人で帰った。春希、凪咲、健誠は先に帰ってたみたいだ。その道中、彩がずっと俺の腕に抱きつきっぱなしだった。可愛すぎじゃないかな？
そして、次の日。ガラッと教室のドアを開けた時、どことなく怪しげな雰囲気を感じた。それは俺の後ろから迫っていた。
「異端者発見、処罰を開始する」

『了解』

「うわ、お前らなんだなにを……ってぎゃぁぁぁ

楠葉生の濃い一日

「楠葉学園生徒会会則……ひとーつ！ティッシュは多めに使用しろ！」

「何にだよ！いや、というか、アンタら誰だよ⁉」

「おいおい詠斗、楠葉の生徒なのにそんなことも知らないのか？」

「海斗……お前は知ってるのか？」

「もちろんだとも。中央から『カリスマ性徒会長佐藤』『特殊性癖持ち夏村』『変態語句愛者山内』『ペドフィリア石田』『毒に侵されつつある一般人蛇石』。うちの変態五英傑だよ」

「あー……察したわ」

「要するにうちの作者どｍ」

◇◇◇

「はぁ……あー……！」

こんな夢を見るのは久しぶりだ。物書きをしていると脳内で「設定した台詞」で「ぬるぬると」動いてくれるので発想には困らないのだが、今回のはボツだ。はぁ……せっかくのアイディアだったのに、残念だ。

「んぁ？なんでこんなに着信来てんの……？」

７：５８　高道海斗

７：５９　九重創

８：０１　九重創

８：０９　日比谷実音

８：１２　大矢根春希

８：１５　高道海斗

８：１９　日比谷実音

これほどの大量着信が。今日は何かあっただろうか？遊びの約束もしてなかったはずだし、この時間帯にはリア帯で見たいアニメもなかったはずだし……。電話返してみるか。

プルルルプルルルプルルル

「何をやっている秋原詠斗ぉおおお！」
出たと思ったら急に聞こえてきた大声にびっくりする。というか、この声はなっちゃん先生⁉
「先週から土曜は課外だと言っていただろう！すぐに準備してこい！」
土曜……課外……ほうほう。完璧に忘れてたぜ。
「す、すみません！今、行きます！」
そう言って、制服に着替えて俺は家から飛び出した。
◇◇◇
「すみません、寝坊して遅れました！」
「そんなことはいちいち言わなくていい。それより早く席に着け」
なっちゃん先生は明らかに不機嫌そうにしている。あー、詠斗は思いっきりやらかしたな……。家から全速力で来て１０分で着いたっていうのに……ドンマイ。
８：５９　秋原詠斗、学校着。
「じゃあ、授業を始めるぞ。この前渡したプリントは持ってきたか？持ってきたよな？持ってきてなかったら空気イスで受講してもらうからな」
４０分後……。
スピー　スピー　スピー
俺の斜め後ろに寝ているやつがいる……！遅刻して来たはずなのに反省の色が１つも見えねぇ……。
「『Ｂｏｂ　ｉｓ　ｕｓｅｄ　ｔｏ　ｃｏｏｋｉｎｇ　ｔｒａｄｉｔｉｏｎａｌ　ｆｏｏｄ』『ｂｅ　ｕｓｅｄ　ｔｏ　ｄｏｉｎｇで『～することに慣れている』という意味なので、ここを秋原……はぁ……」
しかもタイミング悪いところで当たるし……仕方ない、起こすか。
「詠斗、おｋ……」
「高道、起こさなくていいぞ。私が面白いことをしてやろう」
北条先生が取り出したのは携帯音楽プレイヤー。イヤホンを付けて、詠斗の耳に掛ける。教師が授業中に使っていいのかどうかは置い

といて……。
「あぁぅ……ぅぁあ」
「何してるんすか、先生」
「ん？あぁ……夢精するかなと思って。もう少しだな」
「「授業しろ！」」
俺たちクラス全員の声が揃った瞬間であった。
◇◇◇
「ふぁ……やっと課外も終わった」
俺が危なく夢精しそうになってから2時間後、俺、実音、創は掃除を早く終わらせて彩を迎えに行ってる海斗を昇降口で待っていた。
「詠斗は終始寝てたじゃん……」
「俺はいつもはこの時間に起きてないからな！」
「自慢気に言うことじゃないでしょ」
なぜか二人は呆れている。心外だ。
「ねぇ、今日って二人暇？」
創が問いかけてくる。
「うん。何かするの？」
「あとの半日はみんなで遊びに行きたいなと思って」
「俺はいいぞー」
「僕もいいよ」
「じゃあ、あとは海斗たちだね」
それからなんやかんや10分程度話してると春希と毒姫が一緒に来た。
「よっ、詠斗。何してんの？」
「最近、幸せオーラを出しているやつら待ってた」
「海斗先輩と彩ですね」
毒姫もとい……あれ、名前何だっけ？えと、えっと……ナーヴギアじゃなくて、凪咲だ。凪咲は春希がいる前だからか一応、敬語で接している。
「海斗たち付き合い始めたし僕たちともあまり遊べなくなるかなーって思って、待ってたんだ」

「盛大に遊びにいこうとしてた」
「お前らもバカだなー。アイツらがその程度で付き合いやめるわけないだろ？」
「去年付き合い始めてだんだんと遊ばなくなってったキミが言う？」
創の辛辣な一言が刺さる。こいつもかなり根に持つタイプだからな……俺らのグループでまだ常識人だった春希が抜けて苦労しているんだろう。うん、なんかごめんな。
「そ、それは……その、ごめん」
「おーい、みんな。待たせてごめん！」
海斗と彩が一緒にこっちに向かってきた。
「おっ、海斗！ようやく来たな！」←詠斗が焦ってる様子
「海斗、早く来て！」←実音も焦ってる
「え、あ、おい、どうしたんだよ！」←海斗も戸惑ってる
「よーし！ラウンド2にいくぞ‼」
「ちょ、お前ら待てよ！」
◇◇◇

ゲームコーナーにて……
「ねぇ、春希。これ取って」
「本の積み上げ崩すの⁉無理だろ⁉」
「春希ならできる」
「あ、創。次はこれで遊ぼうよ！」
「え、ガンシューティング？別にいいけどこれ怖いやつだよ？」
「じゃあ、やめる！」
「あ、彩さん？取りすぎじゃない？」
「もっと取るわよ。海斗の分まで取ってあげるから我慢してちょうだい」
「もう持てないんだって！」
「ちっ、どいつもこいつも弱すぎるぜ。ヅダで相手してやってるっていうのに。出直してこい！」

スポ〇チャにて……
「あ、あわわ……きゃっ」
「凪咲ちゃんってローラースケール苦手？」
「……彩、見てないで助けてよ」
「っしゃぁ！ホームラン来たぁ！」スカッ
「海斗……三振どころじゃねぇぞ」
「また来たホームラン！」スカッ
「こっちが恥ずかしくなるからやめろ！」
「創、久しぶりにバスケで勝負するか」
「実音と僕で挑むね。頑張ろうね、実音！」
「了解‼」
「それは反則だろう⁉」

カラオケにて……
「彩と凪咲のデュエット……マジでえんじぇー」
「えんじぇー……」
「ばーかばーか、ばーかばーか、ばーかばーか」
「そっか、この曲も9周年か」
「なんか、創の歌が上手すぎる……」
「詠斗と違ってね」
「私より上手いなんて……！」
◇◇◇
帰りに焼き肉を食べに行こうという話になり、道中にある彩と海斗の家（誤字に非ず）に荷物を置いて向かうと、意外な組を見かけた。
「あれ、健誠となっちゃん先生？」
「あ、本当だ」
みんなでジーっと見ているとあちらも気づいたらしく、健誠が手を振ってきた。
「よっ、健誠」
「おー、久しぶりだな春希も」

「北条先生、今日はすみませんでした」
「なに、もう過ぎたことだ。気にすることはない。だが、これからは気を付けろよ？」
やっぱり、北条先生は絶壁な胸とは違って心は寛容だ……。こんな冗談は目の前では言えないけど。言ったらパロスペシャルをきめられる。
「そんなことよりキミたちは何をしている？」
「さっきまで遊んでいたのでシメに焼き肉を食べに行こうと思いまして」
「ここだと手軽に食べられるし」
「サラダバーもあるし」
「ドリンクバーもあるし」
「ということでご馳走になります。ありがとうございます、北条先生」
「「「ゴチになりまーす」」」
「誰も奢らんぞ。自分たちの金で食え」
前言撤回。心も絶壁のようだ。俺たち男子五人組の連携を以てしてもダメだというのか。
「ところで健誠と北条先生はなぜここに居るんです？」
そこで彩が訪ねる。あ、それは俺も思ってた。
「あー、今日はこいつが地区大会に出場してな。優勝の打ち上げということでここに来たわけだ」
ほう、健誠が地区大会優勝とな。まぁ、こいつにしては楽勝か。全国に行ってたし。
「あ、そうだ。どうせなら、お前らも一緒に食わないか？」
「おー、ちょうどいいしな」
「僕もさんせーい」
「俺もいいぜ」
「春希が行くなら」
「彩、どうする？」
「私は別にいいよ？海斗は行く？」

「うん、彩が行くならね」
「じゃあ、リア充がリア充出来ないように僕も付いていかないとね」
どうしようか。創が残念イケメンに成り下がってしまった。うん、俺たちが悪かったから！そんなに責めないで‼
◇◇◇
「んぁ～、何なんだ最近の後輩は……」
つい３０分前までは正気を保ち、皆を動かし気を遣っていた先生が今じゃこの様になっている。それもそのはず。ジョッキ中のビールを３杯、強めの酎ハイ５杯とハイペースで飲んでいるからここまで泥酔するのだ。
唯一助かったことと言えば、ここが食べ放題飲み放題の店であったことだ。普通の店でここまで飲むだけでかなりの金額が取られるだけだから。
「私より先に結婚して……同期も私を置いていって……誰かイイ人でも現れてくれればなぁ……」
「せ、先生？服、はだけてますよ？」
「別にいいだろこれくらい……熱いんだから……」
ダメだ。悪酔いしてるから何を言っても無駄だ。
「それに目の前にカップルが二組……爆発しろ！」
「「それは言っちゃいかんやつだろ‼」」
「まぁ、その繋がりは大切にするんだぞ。……この年になってからではおそいから……なぁ……」
そう言って、テーブルの上にクテッと突っ伏す。先生も色々たまってたらしい。恋愛面で。
誰か、この人もらってやれよ。マジでかわいそうだから。
※北条先生は無事に生徒のおかげで家に着きました。

合宿に向けて

「えー、今週末には勉強合宿なのでしおりに従ってしっかり準備しておいて下さい。それじゃ、号令」

日直の声で帰りのＨＲが終了した。つまりここから生徒は自由の身になれるということになる。部活に精を出すも良し、友達同士でクラスに残って勉強するも良しだ

まあ…勉強合宿の直前ということもあってみんな支度に忙しそうだけど。俺も例に漏れなくそうだしね

だって仕方ないじゃん！学校が終われば多少遊ぶ時間はあれど、帰ると家の手伝いをしろって言われるんだから。それが夜まで、そこから宿題があればそれを処理して、無かったら疲れて寝ちゃったりして、その他エトセトラエトセトラ……ね、時間無いんだよ

直前に準備していない事実を親に言うと、若干怒られはしたものの、今日は休暇――という名の買い出しに行く猶予を獲得することが出来た。不幸中の幸いだな

とはいえ一人で買い物行くのもねぇ…

「ん？どうしたの創、ボーッと突っ立って」

「ああ、詠斗。ちょっとね…そうだ、今日この後暇？勉強合宿用に買い物行きたいんだけどさ」

「問題ないけど。とはいえ二人ってのもなぁ…よし、あいつ連れて行こう。先校門行っとけ」

「？　お、おう。了解」

なんか、詠斗の連れてくる奴って大体察しが着くような気が…どうせあいつだろ。ニヤついたドヤ顔でサムズアップを決めてたし

ま、いいか。言われたとおり校門で待ってれば

「待たせたなーっ！」
「……はぁ、来たよ。よく分かんないけど」
「やっぱ海斗だったかー」

海斗の首根っこを掴んだままずっと連れてきたんだろう、海斗が見て分かる位ぐったりしてる。あと、凄い不服そうな目で詠斗の事見てる

「やっぱってなんだよ！詠斗に無理矢理連れてこられてなかったら俺だって来てないっての！」
「どうせお前もなんか買う物あるんだろー？まあ暇だろうし着いて来いよ」
「……俺はこの前彩と行った買い物（デート）ついでに揃えたから」

その瞬間、詠斗の出す雰囲気が変わった。察しは着く。十中八九、今海斗が惚気たからだろう。うん、俺もなんか…イラッときたかも

「創、良かったな、今日の買い物代全部海斗が払ってくれるってさ」
「更に俺と詠斗に好きな物１つ買ってくれる？うわーさっすが彼女持ちは違うなー」
「そんな持ち合わせないから！創まで俺を苛めるか?!」
「苛める？違うよ。ねぇ詠斗」
「創の言うとおり。原因はお前だからな」
「俺、悪いことしてないよね?!」

そんな言い合いをすること数十分、学校の近くにあるショッピングモールに到着した。ここは食料品、日用品、本に薬に楽器にと、基本的な物なら何でも揃う。学校に近いという立地の良さからうちの高校の生徒も数多く通う人気モールだ

そこの2階、目当ては日用品売り場にありそうな――

「お、あったあった。コンパクトな歯ブラシセット」
「そういうの持ってないのか？」
「残念ながらうちにあるのは麺棒くらいですので…」
「いやそれは流石に無いだろ」
「ま、これが無いのは冗談じゃないけどね。こんなの中学の修学旅行行った以来行方不明だって」
「まあ…分からなくはないかも」
「それじゃ、はい海斗っ」
「マジで言ってる…？マジで買えって言ってる？」

歯ブラシは俺の手によって海斗へ。因みに肩はがっちりと詠斗が押さえているので逃げ道は無い。残念というか自業自得というか…つまりそういうことだ。ま、流石に買わせるのは可哀想かな

「ホントに買いたいんなら買ってきてもいいよ？俺は結構冗談のつもりだったんだけど、海斗が買いたいんならその意欲は買わないといけないよねー」
「だったら初めから自分で行けよ！紛らわしいんだよ！」
「日頃の行いだな、海斗」
「詠斗は俺を目の敵にし過ぎ」
「ソ、ソンナツモリナイケドナー」
「ダメだこれ…」
「じゃあ俺買ってくるから、好きにイチャついててよ。詠斗相手なら誰も文句言わないだろうし」
「俺にそういう趣味はないっ!!」

なんか海斗が後ろの方で騒いでるような気がするけど、ま、気のせいだろ。レジ行こっと。邪魔しちゃ…悪いよね？どうせすぐ終わるし詠斗に任せとこ

ささっと会計を済ませて戻ってくると、ベンチに海斗と詠斗が普通に座ってた。なんだ、何もしてないのか。…でもその割には詠斗が満足げなような…

「お待たせー。どうしたの詠斗」
「お、来た来た。創、たこ焼き好きだよな？」
「たこ焼き？うん、好きかな。それが？」
「なんか買わないとお前らどうせしつこいだろー…仕方ないから後で買ってやるよ」
「おぉー…太っ腹さん」
「後でな。まずは創の買い物を――」
「奢ってあげて？」
「それは奢らない！」

その後、新しい消しゴムやシャーペンの芯、遊ぶ用のトランプなど、必要な物や必要そうな物を一通り買い揃えたので、俺たちはみんなでフードコートで一休みしていくことにした。因みに言うと、詠斗はあれからたこ焼きの事しか頭に無かったようで、凄いフードコートに向かうのを急かしてた。そこまでか？たこ焼きって。今だって、凄い美味しそうに食べてるし

「詠斗ってそんなたこ焼き好きだったっけ？」
「ん～？いや、普通に腹減ってて。昼食ってないんだ、忘れたからな」
「学校で買えるじゃん」

海斗が一緒に買ったらしいたい焼きを囓りながら、真っ当なツッコミを入れている。確かに買えるよ。それも相場よりちょっと安く買える

「海斗さん…俺にそんな金があるとお思いで…？」
「たかだか数１００円だろ。１つくらい買えばいいのに」

「その1つが、2つ3つとなり、人は破産していくんだ…」
「要は昼飯忘れては買ってた結果、無一文になったのな。理解理解」
「…創の家バイト募集してない？」
「うちの蕎麦全部無くなりそうだから却下」
「じゃあうどんにするから！賄いはうどんで我慢するから！」
「賄いを欲してる時点で却下！」
「…ケチか」
「少しは自分の行いを省みろよ」

なんだかんだで海斗は言われたことは真面目にこなしてくれるからもしもの時に頼めるし、セットで彩が着いてくる確率高いから頼む気ではいるけど…詠斗はなぁ…そもそも接客が無理そう。怒らせてそう。だから頼むなら相当ピンチな時になるかな

「うんうん、やっぱ俺くらい気の利く男じゃないとな」
「否定しない。海斗役立ってるし」
「たはぁーっ！無理かぁー！」

…ん？とか話してる間にたこ焼き無くなってるし！詠斗…せっかく海斗が買ってくれたんだから分け合うって精神は無いのかねぇ

「たこ焼き…詠斗お前食べ尽くしたな…？」
「創も1つ食べてた」
「いやそれだけなんだが?!」
「いいじゃん。どうせ買えれば蕎麦食べれるんだろ？俺の空腹感に免じて許してくれ」
「はぁ…ま、そんな気はしてたけどね」
「ど、どうする？買ってくる？創の金で」
「いや、いいよ。俺もそんな金無いし。あ、今度これのお返しするわ」
「1つしか食べてないのに…」
「それは詠斗に言ってくれ。買ってくれたのは事実だしね」

「悪いなー、で、何かくれんの？」
「う～ん…蕎麦粉？」
「は？」

うちがちゃんと仕入れている蕎麦粉だから店で売ってるやつより味がしっかりしてるし、なによりすぐに用意できる。うん、プレゼントに最適…っ

「俺蕎麦打てないからいい…遠慮しとく」
「じゃあ白い粉で」
「それはなんかニュアンスが違う！」
「じゃあ俺が貰おうじゃないか」
「それはもっと違う！」

フードコートでのひと揉めも、結局詠斗に収入があり次第何かを買ってあげると言うことで落ち着いた。それがいつになるのかは分かんないけど…それは別に俺は関係無いかな

とりあえず家帰って支度しないと

熱盛りッ！なリア充共

――これは海斗と彩が無事付き合って、少し経った頃の話。

『熱出た』

朝、俺の眠気を吹き飛ばしたのはたった三文字のメッセージだった。

俺はすぐさま着替え、朝食をすっぽかして隣の凪咲の家に向かった。インターホンには凪咲のお母さんが出て、お見舞いに来たと言いすぐに開けてもらう。

俺が中に入ると、凪咲のお母さんは〝あとはお願い〟と言い残し仕事に向かった。どうやらすぐに仕事に行かなきゃいけなかったようで、凪咲をどうしようか考えていたそんな時に俺がタイミング良く来たのでお願いされたということみたいだ。

「凪咲～入るぞ」

「ちょ、ちょっと待って――」

凪咲の部屋に入った俺を待っていたのは、凪咲だった。いや、正確に言うなら、〝下着姿〟の凪咲だった。

俺と比べれば小柄な凪咲が、見た目に合わず黒いレースの下着を上下付けてましたねはい。一体どこでそんな破廉恥（はれんち）な下着を買ったのだろうこの子は……。

「どしたの」

「着替えてた」

「一人で？」

「いけると思って」

「寝てなさい」

「下着で？」
「……パジャマどこ」
短い言葉で会話を交わす俺達。
フラフラと今にも倒れそうな凪咲をまずベッドに横にし、凪咲が脱いだであろうパジャマを再び着せる。途中で他にも大人なブラやパンツが落ちていてそれが見え隠れしていた。
……非常に目が幸せになった。夜の営みをする際にあれ履いてくれたらめっちゃしあわ……（自主規制）
ともあれ、思考がピンク色になったりと一波乱あったが無事に凪咲をパジャマ姿に変えることができた。
辺りに散らばっていた下着類は、下手に触る訳にも行かなかったのでそのままにしてある。目がチラチラ向かってしまうのが辛い。
俺は、勉強机に付いてくる椅子をベッドの傍に持ってきてそこに座り、凪咲に寄り添う。

「凪咲、なんか食べたか？」
「食べてない」
「なら薬も飲んでないか。お粥でも作るかな」
「材料は多分ある……かも」
無ければ買ってくるさ、と言い残し一旦凪咲の部屋を出る。するとその時、現在進行形でイチャイチャしてるであろう海斗から連絡があった。
本来なら今日、新婚ホヤホヤの（結婚はしてない）海斗と彩と共に俺と凪咲がデートするという巷で言うダブルデートというのを計画していたのだ。きっとその連絡だろうと考え、凪咲が熱を出したから無理だとメッセージを送った。初デートかどうかはよくわからんが２人で楽しんでこいと付け足し、携帯をしまい再び台所へ向かう足を進めた。
「こればっかしは仕方ないな……気を取り直して凪咲の看病に専念しますか」

冷蔵庫を開けるとあ～ら不思議、何にもなかった。恐る恐る炊飯器を覗くとやはり期待を裏切らない凪咲母、こちらももぬけの殻。

「お願いって、まさかこっちの事も入ってたんじゃ……？」

俺は静かに仕事に向かった凪咲母に怒りを向けるのだった。

「悪い凪咲、ちょっとばかし買い物行ってくるわ。なんか食べたいものとかあるか？　できる限り買ってくるぞ」

「……今日発売の新かｎ――」

「よし、リンゴだな。任せとけ！　行ってくる」

「……むぅ」

そんなもの買ったらお前寝ようとしないだろ、と心の中でツッコミを入れ凪咲を一人にするのは少々不安だが、俺は近くのスーパーに全速前進するのだった。

春希がお見舞いに来てくれた。

今朝、いつものように起き、ベッドから降りようとした私は謎の違和感に気づいた。

まず視界が定まらない。起きたばかりだから目が開ききっていないのだと思ったが、いざ立ち上がると何だか体全体が重く感じた。確かこういう時って熱があったりするんだっけ、なんてどこか他人事のように考える私。しかしそんな予想は、手をおでこに当てた瞬間に確信に変わった。

『熱が出た』

世界で一番大好きな人に1番に私は連絡した。彼氏という事もあ

るけれど第一に家が近いからっていうのもある。後、一番信頼してるから。
そしてしばらくしないうちに春希はやってきた。連絡してからまだ5分も経っていないことに何故だか嬉しくなってしまった。
しかし嬉しくなってる暇が無い事に気づく。私はある作品で読んだ看病のシーンを思い出し、なんとか下着だけでもと新しいのに変えている途中だった。そんな時だ、部屋のドアがノックされたのは。
まだ下着姿の私は、反射的に〝ちょっと待って〟と声に出していた。しかしそれで春希が止まるわけもなく、ドアは開けられてしまった。
そして目が合った。数秒ほど沈黙し先に口を開いたのは春希だった。

「どしたの」

当然の反応だった。
もうちょっと照れたりしてくれても良いのに……なんて思う。

「着替えてた」
「一人で？」
これも当然の反応だ。
普通、熱が出たなんて言う人が一人で着替えるなんてまず無い。しかも下着だけ。

「いけると思って」
「寝てなさい」
素直に従おうと思ったが、ほんのちょっとだけからかってみたくなった。

「下着で？」
「……パジャマどこ」

あんまりいい反応は貰えなかった。でも一瞬間があった。きっとそれもいいかもとか考えたに違いない。
その後、私は素直にパジャマを着せられた。途中、春希の顔が赤くなる時があったけど何考えたんだろ？

「凪咲、何か食べたか？」
私が食べていないと答えると、春希が作ってくれると言ってくれた。正直、いやかなり嬉しかった。もう今ならどこへだって行ける。どんな夢だって叶えられる。そんな気がする。
いや、一旦落ち着こう。まず家に材料と呼べる材料があっただろうか？　昨日全部使ってしまおうとお母さんと話してなかっただろうか？
どうだったか分からなかったからとりあえず曖昧に〝多分ある……かも〟と言っておいた。それを聞いた春希は部屋を出て台所へ向かっていった。
少しすると、再び春希は部屋に戻ってきた。どうやら何も無かったらしく、買い物に行ってくるらしい。
何か食べたいものとかあるか？　と聞かれ私は迷わず今日発売の新巻を買ってきて欲しいと、そう言う前に春希に遮られてしまい失敗に終わった。

「それじゃ行ってくるな」
「ん」
……。
……。
……。
……静かだ。

春希がいなくなった家の中はとても静かで、自分以外誰もいないのだと再確認する。

――寂しい。

ここまで心細くなるのは初めてだった。誰でもいい、誰かそばにいて欲しい。もしかしたら今までの人生でこんなに弱気になったのは初めてかもしれない。

「……こんなとこ、春希には見せられない」

彼氏にベッタリしてるだけなら誰だってできる。私は春希が安心して背中を預けられるような強い彼女になりたい。私の目標のヒロイン、あの黒の剣士を支えた閃光の彼女。あの人のように。

目標に近づくためにまずは、治すことに専念しよう。

「よし、無事に薬も飲んだな。後は寝るだけだぞ」

「このままじゃ寝れない」

「あぁ……汗かいてるからベタベタして落ち着いて寝れないか」

うーん、ここは俺が拭いてあげるべきか。いや、しかしいくら恋人だからと言って平気な顔して拭けるかと言われたら無理だ。しかしこのシチュエーション、どこのラノベ場面だよ。

悩んでいるとその時、凪咲の家内にインターホンが鳴り響いた。

凪咲にちょっと見てくると伝え、玄関に向かう。そしてドアスコープから外を覗くとそこには見知った顔の2人が見えた。

「海斗に彩じゃないか。悪いな今日は約束通りいかなくて」

「いいって、それよりこれお見舞いに買ってきたんだコンビニのだけど」
「ありがとう」
海斗からビニール袋を手渡され中を見るとブル〇リアヨーグルトとフルーツゼリーなるものが入っていた。片方は俺への差し入れらしい。

「春希先輩、凪咲の様子はどうですか？」
「今ちょうど食事と薬を済ませた所なんだ。ただ、ちょっと問題が起きてな……」
「問題って？」
「実は……」
俺は、凪咲が汗をかいていてそのままでは寝れない状況な事。そして体を拭こうにも、いくら恋人とはいえ男の俺が拭くのはどうかと悩んでいた事を話した。
体を拭く～の辺りで海斗がめちゃくちゃ頷いてたが共感してくれたってことでいいのか？

「なら私がやります。同性なら大丈夫ですから」
「わかった。今、タオルとか用意する。２人は先に凪咲の所行ってくれ」
２人を先に向かわせ、俺は洗面所からタオルを取り、少し小さめの桶に水を半分くらい注いで２階まで運んだ。
その後、俺と海斗は凪咲の部屋から出て終わるの待っていた。凪咲の部屋に海斗が居続けようとしていたのを彩にドヤされた時は少々笑ってしまった。

「仲睦まじいようで」
「そっちこそ」
「尻に敷かれてないか？」
「……その生々しい質問はまだやめてくれ、ほんとそうなりそうで

怖いから」
『ううっ……何この大きさ』
『いつも春希に……してもらってるから』
時々凪咲の部屋から聞こえる彩と凪咲の声に反応してしまってる俺。男ってサイテーと言われるのも頷ける、うん。てか、凪咲さん？
しれっと嘘つかないでね。
ふと隣を見ると同じ事を思っていたのだろう海斗と目が合った。これには思わず苦笑い。男の性（さが）を再確認した気がした。

「ありがとうな。せっかくの休日デート邪魔しちゃったのに」
「それはもういいって、それに彩が黙ってないしな」
「そっか、この埋め合わせはいつかしないとな」
「おう、楽しみにしてるよ」
俺たちはどちらからともなく握手をしていた。男同士の熱い友情という奴だ。
すると終わったのか部屋のドアが開き2人が顔を覗かせていた。

「一応着替えも済ませましたけど……って、何してるの？」
「……恋人のＢＬはお断り」
女には男の友情は理解されないらしい。

夢

『あなたの夢はなんですか？』
君はなんて答える？
俺には見つからない
なぜならそんなことを考えたことないからだ
今、楽しめればいいと思ったからあえて夢について考えてなかったんだ。

「将来の夢？」
その発端は一年前、それは俺が病気で入院してる頃の話だ
その頃たまたま詠斗、海斗、創がお見舞いにきて、少し話していると、いつの間にか詠人が俺の机で頭を抱え、作文用紙と格闘していた
それを見て、呆れた様子で俺は詠斗に尋ねた
そうすると作文用紙とにらめっこしてる詠人の変わりに海斗が答えてくれた
「あぁ、それが今日の宿題なんだと」
その時、進路についてＬＨＲでかんがえるらしく、そのために事前予習の為にやっているらしい
だけど……詠斗の作文用紙はまだ綺麗な作文用紙だった
「1枚目書いてないじゃん」
「書けないじゃないんだよ！書きずらいんだよ！」
書きずらい？
そんな書きづらいことなんて……せいぜい
二次元転生くらいだろう
そんなの書く人間が……
「なんて書こうとしてるんだ？」
「えーと、二次元転生し……
「ごめん、聴くんじゃなかった」
おい！、海斗それはねぇよ！」

いたわそこの目の前に……
海斗の質問に詠斗は堂々と答えた
その答えを海斗は全部いう前にスパッと切り上げた
確かにアニメオタクとっては二次元への転生は悲願の夢だけれど、
それを書くというのはさすがにやばい
もっと、現実的なことを書こうか
「なんでダメなんだよ！
本当に行きてぇんだから」
「馬鹿か！俺も行きてぇけど、もっと真面目に考えろよ！」
「真面目だよ!!!!」
その夢を真面目に考えるな！
やばいそろそろ話題を変えないと……
「そ、そうだ！創はなんて書いた？」
「人の話を……」
詠斗の話は無視だ
詠斗…頼むから懲りてくれ
「俺は両親の蕎麦屋を継ぐ」
創からは意外とシンプルな答えが出てきた
けれどシンプル過ぎて、捻りがないが、そこが創らしい
「やっぱりか海斗は？」
「俺か？俺は……保育士……か…な
そうかやっぱりあいつはロ……
「おい、詠斗！
俺がやっぱりロリコンだなって思ったろ…！」
マンがあるね……
「そうなんだなみんな夢があるんだな」
確かにみんなには夢がある
だけど
「健誠には夢があるのか？」
「ない」
「まじで？」

いや、正確は昔はあった
「あぁ」
けれども中学になって時は流れて、いつしかその夢が馬鹿らしくなって、
俺は夢を捨てた
「夢を叶えたやつなんていたのかって思ったら、馬鹿馬鹿しくてさ」
その時の俺ははっきりいって馬鹿だった
人の夢を馬鹿馬鹿思えるほどの馬鹿だった
今が楽しければいいと思ってたし、
普通は夢に逃げる人の方が多いが俺は夢が嫌いだ、夢なんて努力しないやつがいう言葉だともおもっていた
そんな言葉を言ったら
海斗と創は絶句した
けれども一人だけ口が開いた奴がいた
「なぁ、健誠、そんなに馬鹿馬鹿しく思えるのか？」
詠斗だった
「あぁ」
俺がきっぱりと詠斗の問いに答えるとさらに詠斗の口が開く
「健誠にはさ夢がないなら、作ればいいじゃん
無理でも何度でも努力すればきっと叶うって
それが夢って言うのは通過点じゃないかなって思う？」
そんなことを言った詠斗の作文用紙には
俺の夢は医療用機器の開発に携わり、いろんな人を助けることとしっかりと筆圧が濃く、丁寧に書かれていた
彼にも意外としっかりとした夢があった
あいつにも、誰かを救うために夢がある
そして彼が言った言葉に俺の何かを吹き飛ばした
「なぁ、海斗！
いい名言じゃね？
何点だと思う」
「自分で名言という当たり―１１４５１４点だ！」

「よっしゃ！」
「褒めてねぇ！」

もしなれるとしたら俺は……

俺には昔、特撮のスーツアクターになるという夢がある
けれども、こんなことになったり、
現実を見過ぎたせいで
その夢は亡くなったと思ってた
けれど、違った
アクターになるという時点の夢を最初から諦めてたんだと

その夢、俺は詠人が、置いていった作文用紙に「将来の夢」の作文をかいた

『将来の夢はアクターになる
けれどまず最初に達成させる夢は
この大切な仲間と一緒に卒業すること』
と
今は、達成できない夢を描いた